

# 国際シンポジウム「日米帝国の総力戦・マイノリティ動員・レイシズムを相比する」

## International Symposium: Comparabilities of Total War, Minority Mobilization and Racism Across US and Japanese Imperialisms

参加者氏名 (\*名字アルファベット順)

タカシ・フジタニ (トロント大学)  
TAKASHI FUJITANI (University of Toronto)

板垣竜太 (同志社大学)  
ITAGAKI RYUTA (Doshisha University)

駒込武 (京都大学)  
KOMAGOME TAKESHI (Kyoto University)

李孝徳 (東京外国語大学)  
LEE HYODOK (Tokyo University of Foreign Studies)

増淵あさ子 (日本学術振興会・特別研究員)  
MASUBUCHI ASAKO (Japan Society for the Promotion of Science, Postdoctoral Researcher)

水谷智 (同志社大学)  
MIZUTANI SATOSHI (Doshisha University)

中村理香 (成城大学)  
NAKAMURA RIKI (Seijo University)

中野敏男 (東京外国語大学名誉教授)  
NAKANO TOSHIO  
(Tokyo University of Foreign Studies, Professor Emeritus)

酒井直樹 (コーネル大学)  
SAKAI NAOKI (Cornell University)

渡辺直紀 (武蔵大学)  
WATANABE NAOKI (Musashi University)

山田智輝 (京都大学・大学院生)  
YAMADA TOMOKI  
(Kyoto University, Doctoral Student)  
(\*フジタニ発言翻訳担当)

尹京順 (平和統一研究院・研究教授)  
YUN KYUNG SOON  
(The Institute for Peace and Unification Studies)

### キーワード

人種主義 総力戦 アジア-太平洋戦争 マイノリティ 戦時動員

### Keywords

racism; total war; Asia-Pacific War; minority; wartime mobilization

原稿受理日: 2021.01.24.

*Quadrante*, No.23 (2021), pp.9-60.

### 01 水谷智:

「日米帝国の総力戦・マイノリティ動員・レイシズムを相比する」シンポジウムを開催させていただきます。本日、司会を務めさせていただきます、水谷智と申します。よろしくお願いいたします。

それでは開催の趣旨について、李さんから話していただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

### 02 李孝徳:

コロナウイルスの終息が見えず憂鬱な日々が続くうちに、日本列島のとてつもない暑さの中、本シンポジウムに参加していただきありがとうございます。いろいろな方にご助力いただいていたにもかかわらず、今春2020年3月に計画していたシンポジウムがコロナ感染の拡大で中止になったため大変残念でしたが、ずいぶんかたちは変わったもののこうして開催できることをたいへん嬉しく思います。



開催にあたって、本シンポジウムの簡単な経緯を説明しておきます。今日のシンポでその著作を取り上げるタカシ・フジタニさんと知り合ったのはもう20年以上も前のことになります。『天皇のページェント』の著者としては存じ上げていたのですが、実際に出会ったのは、今回報告される中野敏男さんが代表で運営されていた科研プロジェクトを通じてのことでした。その中野さんが代表であった科研プロジェクトは、中野さんの東京外国語大学の前任者であった社会学者の山之内靖さんが「総力戦体制を經由して階級社会からシステム社会へ」というテーゼで展開されていたプロジェクトを引き継いだもので、山之内さんのプロジェクトが米国、ドイツ、日本の総力戦体制の比較研究だったものを、中野さんはそこに帝国主義／植民地主義のファクターは不可欠だとして組み込み、大日本帝国の版図であった東アジア——沖縄、韓国、台湾、中国——と大日本帝国とアジアの覇権を競った米国を射程に入れてそのプロジェクトを更新し、展開していったわけです。

今はもう見る影もありませんが、当時まだ私は若手研究者の範疇にぎりぎり入っており、といっても今日の報告者の一人である増淵あさ子さんのように、中野さんとフジタニさんをアドバイザーに持ち、優秀な研究者として将来を嘱望されているといったことのない無知な研究者で、中野さんのプロジェクトをとおして、今回のシンポジウムに参加されている方々に出会い、多くを学びながら、東アジアを射程にした総力戦と帝国主義／植民地主義という問題系について考えてきたということがあります。

このたび、といってももう9年前になりますが、フジタニさんが出された*Race for Empire* は、まさにそうした総力戦と帝国主義／植民地主義についてトランスパシフィックに論じたもので、優れた研究として深く感銘を受けたと

ともに、ご本人がまったくあずかりしらぬところで、私は勝手に意図せざるこのプロジェクトの「成果」だと思い、深く興味を持ってきたことがあります。とりわけ日系人米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士に焦点が当てられた本書は在日朝鮮人である私にとって、他人事ではない問題でもありました。

数年前、本書の日本語版が計画されていると聞いて待ち遠しく思っていたのですが、なかなか出る気配がないので、「シビレを切らして」——これはこのシンポジウムに参加している板垣竜太さんの表現なのですが——翻訳者たちの作業にはっぱをかける役割を自らかってでたということがあります。日系人米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士を人種と帝国という観点から考えるという本書の企図は、米国では驚きを持って／あるいは理解しがたく受け止められたと思うのですが、実は両者の問題は、アメリカ以上に深く日本に関わる問題であって、日本では戦後きわめて鈍感になっているその帝国性と人種主義についてあらためて考察する重要な契機になるものと思ったからです。

そして、本書の日本語版の刊行にあたって、いわゆる専門研究における評価を越えて本書の多様な広がり理解し、議論できる人々と一定の議論の場を作っておきたいという思いから今回のシンポジウムを企画した次第です。翻訳プロジェクトの末端に関わりながら、本シンポジウムの主催と事務局も担当しているので、報告を行うのは実は荷が重かったのですが、こうした場を報告者として共有することはなかなかない機会だと思い、蛮勇をふるって報告者としても参加することになりました。

Zoomでの国際シンポジウムということで、さまざまな不安から参加者を限定して行うことになりました。しかし参加してくださった方々は付き合いの長い方も多く、また誠実かつ真摯に研究に取り組んでおられる方ばかりなの

で、充実した会になるものと期待しております。短い時間ではありますが、どうぞよろしく願いいたします。

### 03 水谷：

李さん、ありがとうございました。それでは、簡単にフジタニさんのほうから一言いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

### 04 タカシ・フジタニ：

こんにちは／こんばんは。今日のシンポジウムの参加者には、ご存じの方も多いのですが、初めての方もいらっしゃいますので、本当にこれからの議論を楽しみにしています。李さんが言われたように、20年以上のつき合いがある方がかなりたくさん参加してくださっているので、本当にありがたいです。さらに酒井さんは30年ぐらいのつき合いだと思うのですが、本当に恐ろしいほどの長い時間という感じですね。それと、若い方と、またその間の中間的な方が参加されてもいて、いろいろな専門分野の方がおられるので、面白い、刺激的な議論ができるのではないかと考えています。コロナパンデミックのさなか、いろいろと思いがけないような出来事もありますが、今日のシンポジウムはずっと長い間会ってない方に会えるとてもよい機会にもなりました。

まずは、今日 *Race for Empire* の日本語版『共振する帝国』の刊行が準備されているということで、皆さんに日本で議論していただくことにお礼を申し上げたいと思います。そして三人の報告者にも感謝を表したいと思います。そしてまた、快く司会の役を引き受けてくださった水谷さんにお礼を述べたいと思います。また、この中に、私がずっと長年おつき合いがあって、そしてまた、指導してくださってきた先生方が多いので、お一人一人お礼を申し上げたいんですけど、時間があまりないので、皆さん

に、あるいはその方々にお礼を申し上げます。とても簡単ではありますが、とりあえずこれで挨拶を終わらせていただきます。

### 05 水谷：

フジタニ先生、ありがとうございました。それでは、ここから報告のほうに移りたいと思います。それでは、まずトップバッター、増渕さん、お願いいたします。

### 06 増渕あさ子：

増渕あさ子と申します。現在、日本学術振興会特別研究員として、沖縄の米軍統治をテーマに研究をしております。正直、今ものすごく緊張しております、私自身が大変お世話になってきました歴代の指導教員の先生方を含め、すばらしい研究者の方々が今日ご出席されている中で先陣を務めさせていただくこと、本当に僭越で、恐縮しております。私事ですが、私はトロント大学で、『共振する帝国』の翻訳者の一人でもあるリサ・ヨネヤマ先生、そしてフジタニ先生のもとで博士論文を執筆致しました。論文の執筆の過程で、この本はもちろんなのですが、この本を巡ってお二人と、そして今日も聞いてくださっている他の院生の方々とたくさん議論を重ねてきたことに、とても大きな影響を受けています。ですので、今日このような場でコメントさせていただくことを、大変光栄に思っています。

今回の私の報告の役割としましては、まず『共振する帝国』において展開される論点、そして理論的枠組みや方法論を簡単に整理したうえで、私自身の研究関心である戦後沖縄史、とりわけ米軍による沖縄占領統治の歴史の文脈に引きつけて考えた時、『共振する帝国』が提示する問題系をどのように捉え返すことができるかについて、少し考察を述べさせていただきたいと思います。基本的には事前に配布

してありますレジュームに沿って進めてまいります。

さっそくですが、『共振する帝国』の論点、理論枠組み、方法論ですが、もちろん本当に非常に重厚な本で、様々な論点が重なり合いながらこの本が構成されているわけですが、ここでは特に、私自身が重要だと思ふ点、今日も恐らく論点になるのではないかという点、そして、これまで私もアメリカ、カナダで本書を題材にした読書会やゼミなどにいくつか参加してきましたが、そういった場でも繰り返し論点として出されていた点を中心に述べていきたいと思ふます。

まず、まだお読みになっていない方もいらっしゃるということで、この本の大きな議論の流れとしては、日米両帝国が総力戦体制下においてその人的資源を確保するために、エスニック／コロニアルな集団である日系アメリカ人、日本帝国であれば、朝鮮人兵士を動員・包摂していった、そのプロセスを問うということがあると思ふます。そこで、論点の一つ目としては、やはり、その「総力戦体制下の人的資源の確保」ということなのですが、これはもちろん、私が説明するまでもないことですが、これまで山之内靖さんらをはじめとする総力戦体制論の議論の蓄積がされています。この点については、この後発表される中野先生がお話しされることでもあると思ふます。一方で、特に冷戦構造解体後に福祉国家研究が広がるにつれて、福祉国家の源流、例えば、厚生省の設置などを総力戦体制に求める議論などが出てきています。いずれの議論の潮流においても、総力戦体制において進行する国民化・労働力化のプロセスやメカニズムが焦点とされています。こうした議論の枠組みから抜け落ちているように見えるのは、帝国の広がりの中で戦時総力戦体制がどのように作用していたのか、帝国-国家形成の過程で人種化・植民地

化されたマイノリティとして組み入れられた集団は、総力戦体制下においてどのように、恐らくは内地日本人とは異なるかたちで、国民化・労働力化されていったのかという問いではないでしょうか。

一方で、論点の二点目にうつりますが、フジタニ先生は、総力戦体制下における日米両帝国におけるエスニック／コロニアルな集団に対する統治転換、統治の正当化の論理の変化を、フーコーによる近代統治性 (governmentality) の分析と、ファノンやバリバルによるレイシズム理解を援用した、「粗野なレイシズムから上品なレイシズムへ」という枠組みから検討されています。ここで私自身非常に重要だと思ふているのは、フジタニ先生が繰り返し本書で述べられているように、ここで起きているのは、「殺す権力」から「生かす権力」への、あるいは「粗野なレイシズム」から「上品なレイシズム」への単純な移行ではなく、後者の論理の前景化によって、実際には継続しているはずの人種主義・帝国主義の暴力が否認され、覆い隠されるという点です。つまり、従軍をとおした生政治への包摂と戦場におけるジェノサイドや性暴力というのは同時に進行しているわけです。

しかし、ここで一つ問いたいのですが、フーコーの議論の枠組みでは、そもそもレイシズムがどのように作動して組織化されるか、すなわち、誰が生かされ、誰が殺してもいい者とされるかという人種化・植民地化のプロセスが問われないのではないのでしょうか。本書の中でも、日系アメリカ人と朝鮮人が、それぞれなぜ、どのように違ったかたちで人種化され、植民地化されたのかという文脈については問われていないように見えます。この点、つまり朝鮮人と日系アメリカ人の人種化・植民地化のプロセスを同様に語っていいのかという点については、恐らく李先生や中野先生からもコメントがあると思われまふ。

そして三点目の論点としては、日米両帝国間の競争 (Race between Empires) ということがあります。日米いずれも、それまでの古い帝国とは異なるかたちで、自らの帝国を維持・正当化すべく、人種化・植民地化された少数者を帝国のうちに包摂することで、自身のレイシズムを否認すると同時に、相手の帝国の人種主義を批判するという動きがありました。日米双方において、朝鮮人志願兵・日系アメリカ人志願兵は、「自らの自由意志」で「国家への忠誠を誓い、なおかつ国家のために死ぬこと」を選び取った主体として、過度に可視化され、国民化・同化・近代化を達成したモデルとして表象されるようになるわけです。米国では、これが冷戦期に継続され、日系人は「モデル・マイノリティ」として過剰にアメリカ社会へ同化することを求められ続けるという、総力戦体制から冷戦への継続も、本書の重要なテーマになっています。

四点目ですが、本書では、兵役試験の際のインタビューが大きな分析対象になっています。なぜ兵役試験 (soldiering) に注目するかについて、フジタニ先生が述べられている箇所を引用します。第2章に出てきますが、「兵役は、兵士自身のみならず、兵士の代表する人種化された諸コミュニティが、もっとも典型的かつ劇的に、国民共同体の外側から内側へと移行した場であった」というふうに書かれています。ただ、ここでいくつかの質問、疑問がわくのですが、まず兵士としての動員と、その他の戦時動員、例えば、出稼ぎや強制労働、そして「従軍慰安婦」としての動員との関係をどう思うのかという点です。

「兵役試験」を分析対象とすることへの二つ目の質問として、軍隊という集団の特殊性、そしてインタビューという場の特殊性をどう考えるのかということをお聞きしたいと思います。軍隊ということをお考えたとき、男性中心のホモソ-

シャルな集団であるからこそ発動される、あるいは、逆に否認されるレイシズムというものがあるのではないかとことです。

三つ目としては、これは私自身の研究関心でもあるのですが、社会政策をとおした総力戦体制への包摂—例えば、医療保険制度の対象とされたり、植民地の警察組織が衛生管理の担い手となること—と、志願をとおした軍への包摂は、どう重なり、どう異なっているのかという点です。この本の中では、「志願」、すなわち自らの自由意志で、国家への忠誠を誓う存在が可視化されていますが、「志願」と「徴兵」の差異をどう思うのかという点も併せて考えなくてはいいのでしょうか。なぜそのような疑問が浮かぶかというと、そもそも兵士になることというのは、究極的には国家のために進んで死ぬことを求められるわけですが、このことが果たして「生政治」への包摂といえるのか。むしろ兵士になることによってようやく主体性が確保されるという事態は、これは沖縄の思想家の川満信一さんの言葉ですけれども、「生きながら死亡者台帳の頭数と見なされる」というような事態なのではないかというふうに思えるわけです。ですので、兵役をどう思うものとして考えていらっしゃるのか、ぜひフジタニ先生にもお伺いしたいです。

そして第五点目ですが、カウンター・コンダクト (counter-conduct) への視点です。このカウンター・コンダクトというフーコーの概念については、これまで日本語では「反操行」という訳語が充てられてきたと思いますが、今回、よりフーコーの概念に寄り添うような訳語として、行いに背く「背行」という言葉が充てられています。「背行」に関しては、その定義として本書では「他の者たちを導くために作動させられる、さまざまな手法に抗する闘争」というふうに説明がされています。私が、今回本書を

改めて読み直して強く感じたのは、フジタニ先生の「背行」へのこだわりというか、その瞬間を捉えようとなさっているのをとても強く感じました。例えば、日系二世のいわゆる「忠誠テスト」に対する回答拒否や質問返しといった行為であるとか、日本軍への志願を思いとどまらせようとする朝鮮人の母親の行為というものが「背行」として分析されています。

このような分析を見て行くと、本書をとおして逆説的に明らかにされているのは、実のところ、植民地化・人種化された集団が、いかに生政治をとおして総力戦体制に包摂されきらなかったのかということなのではないかというふうにも感じました。ただし、包摂されきらなかったから自由であったというわけではなくて、包摂されきらなかったエスニック・コロニアルな集団に関しては、「生かす権力」の背後に常に、すでに控えている「殺す権力」というものが、すぐさま行使されるものだと思います。生政治の対象とされなかったことと殺す権力の対象になることというのは、併せて考える必要があるのでしょうか。

最後の六点目ですが、これが恐らく今日の議論の中でも大きな争点になるのではないかとこのように感じているのが、「相対」という方法論です。この「相対」という訳語に関しても、「比較」ではなくて「相対」という言葉にされたというのは、とても大きな意味があつてのことだと思いますが、相対という方法論について、フジタニ先生が序章で述べられているところを引用します。「私はきわめて特殊な意図で『比較可能で相対する』(comparable)とか『相対性』(comparability)といった言葉を用いている。それはすなわち、ひとつの絶対的同一性に還元してしまうことなく、戦時中の米国と日本の類似点を考え、一見別個のもののようにみえるこのふたつの歴史が多くの面でしだいに絡まり合っていたという、そのことを思考可能にする

ためである」というふうに述べられています。こうした視点によって可能になることは、例えば、日本史、アメリカ史、それぞれが隔りがちな、そして相互に共犯関係にある例外主義、特殊主義に対して批判的介入を行うということだと思います。日米双方が描いてきた近代の歴史というのは、決して一国史の枠組みで描ききれぬものではなくて、互いに共振しながら帝国のテクノロジーを生産／再生産していったわけですので、日本と米国というものをつなげて考えることで、初めて帝国の在り方が見えてくるのではないのでしょうか。

一方で、北米と東アジア、それぞれの文脈において、日米帝国の比較、相対という設定自体が、恐らくは著者の意図とは関係のないところで、おびき寄せてしまうような磁場があるというふうに危惧されるわけです。それは、例えば、とても単純な話として、どちらの帝国のほうが「まし」だったかとか、そもそもそんな比較なんてできないとか、そういった反応が予想されるわけですが、そうした反応が出ること自体が、アジアにおける帝国・植民地研究とアメリカにおける「地域研究」との関係性を象徴しているとも言えると思います。そういつたときに、より生産的な議論の在り方としては、比較できないと言ってしまふのではなく、二つの帝国をつなげて考えたときに、何が比較不可能とされているのか。例えば、それは人種概念であったり、国家の成立過程の差異であったり、そういうものが、この本の「相対」の構図をとおしてあぶり出されていくのではないかとこのように感じます。ここまでが、この本の、とても簡単ではあるのですが、論点のまとめになります。

最後に私の研究の文脈に引きつけて、この『共振する帝国』という本を捉え返したときに、どういうものが見えてくるかということをお話して終わりたいと思います。まず一点目で

すが、大きな前提として、私は沖縄占領というものは、まさにこの本で議論されている、共振する日米帝国の戦後への継続としてあるというふうに考えています。それはいろいろなところで見えてくるわけですが、例えば、アメリカの対沖縄占領政策の基本方針。これは、いわゆる「離日政策」という〔沖縄を〕日本から切り離そうとする政策だったわけですが、この政策というのは、実は日本の沖縄に対するレイシズムの観察を基に設定されています。ここで重要なのが、「沖縄人」に対する人種主義的まなざしに関する考察は、日本で作成された資料とともに、ハワイに居住する沖縄系移民と日系移民の関係性のエスノグラフィをもとに作成、記述されたということです。つまり、日米の帝国主義とレイシズムの折り重なりが、冷戦下の沖縄占領体制を準備していったと考えられるわけです。この点で、第5章でフジタニ先生が分析されている、「総力戦体制下から冷戦文化政策への連続性」という視点がとても重要になってくると思います。同様のことを日本の文脈においても考えなくてはいけないというふうに感じていて、日本のレイシズムというのは、帝国の解体後に、国民国家の領土的・主権的境界が再画定されていく過程で、エスニック・コロニアルな差異をその境界の外部に追いやることで不可視化されていったといえると思います。沖縄占領という時空間は、直接的にはサンフランシスコ条約に基づくアジアにおける冷戦体制構築の過程の中で形成されていったわけですが、日米の主権のはざままで宙づりにされた沖縄占領という事態は、レイシズムを根底に抱えた総力戦体制の戦後への継続という視点からこそ再考する必要があるのではないのでしょうか。

二点目に関して簡単に説明しますと、沖縄のいわゆる「復帰」も、この本の議論をふまえると、復帰運動が導き出した成果というより

むしろ（その側面ももちろんあるわけですが）、（実質的な占領体制・日米安保体制を継続させるための）国家による生権力下への再包摂の過程として捉えることができないかというふうに考えられるわけです。つまり、「沖縄人」の再国民化・再労働力化のプロセスとして復帰を検討することで、沖縄が現在置かれている状況をより理解できるようになるのではないかというふうに、私自身の研究課題として考えております。

三点目として、沖縄の歴史経験をふまえると、帝国内でそれぞれの場所が持っていた特殊性というのを考える必要があるというふうに感じます。沖縄もそうですし、さっき少しふれたハワイという場所もそうですけれども、日米という枠組みを設定した時に、どうしても、その間の「太平洋」の島々における経験が不可視化されてしまうのですが、実は、そういった沖縄やハワイ、島嶼の部分において、より帝国のひずみというものが出てくると思うので、そこから見えてくる帝国の姿をつなぎあわせて考える必要があるのではないのでしょうか。例えば、近代の沖縄を考えると、戦前から積極的な資本投下の価値のない場所とされてきて、救済や援護の対象とはならなかったわけですが、そういうふうに資本にとってはいわば「どうでもいい場所」になった沖縄が、その後、戦場になり、軍事基地になって、そして太平洋諸島でいえば、核の実験場になっていくという、そうした連続性があるわけです。帝国の中で政策の対象にはならなかったような場所、そして政策の対象にはならなかったからこそ、資料も限られていて研究対象にすらならないような場所というものをどういうふうに考えるのかということ、を、「生かす権力」「殺す権力」そのどちらからも排除された「放置された場所」というような視点から改めて考えることができるのではないかというふ

うに思います。

最後のまとめのところなのですが、ここまで考えてくると、「粗野なレイシズム」から「上品なレイシズム」というのは、時間的な転換というよりは、むしろ国内での空間的な転移としても考えられるのではないのでしょうか。「上品なレイシズム」というのは、既に帝国内外の他の場所で作動している「粗野なレイシズム」に裏打ちされているわけです。以上のように考えると、総力戦体制で起きていたのは、体制にとって価値のある命か、価値のある場所かという指標をもとに決定されるレイシズムの再分配だったのではないのでしょうか。以上、とても急ぎ足になってしまったのですが、私の発表とさせていただきます。ありがとうございました。

#### 07 水谷：

増渕さん、ありがとうございました。それでは続きまして、李さんをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

#### 08 李：

今回の私の報告は、本書が採用しているユニークなアプローチや方法論など、どちらかといえば理論的な側面について問題提起を行えればと思います。報告の論点は次の五つです。

##### 1. 本書における多様な分析対象と多角的な取り組みの狙いについて

いわゆる実証的かつ比較史的に日系アメリカ人と植民地朝鮮人の兵士動員の歴史研究として取り組むこともできたはずにもかかわらず、そこにとどまることなく相似性と相対性を前提に、多様な題材に多角的な手法で取り組んでいるのは、現況の歴史研究に対する筆者なりのある種のチャレンジではないかと思える。こうした本書の狙いはどのようなものなのか。

##### 2. 「エスニック／コロニアルなマイノリティの戦時動員を可能にした粗野な／排除のレイシズムから上品な／包摂のレイシズムへの形態変化」という本書のテーゼについて

極めて重要かつ刺激的なテーゼだと思うものの、一方で本書の少なくない読者が引っかかる点ではないかと思われる。というのも本書でも繰り返し述べられているように、上品な／包摂のレイシズムが現れて以降も粗野な／排除のレイシズムはなくなっていないからである。両者の併存状況を見ると「ある局面における排除のレイシズムの回帰」だけでは説明がつかないように思われる。おそらくここにはレイシズムの様態 (modality) が変化したということが関わってくるのだと思うが、それをどのように考えるか。

##### 3. エスニック／コロニアルな被統治人民の主体化と国家権力の関係について

フーコーは、その生-権力論や統治論で、近代市民社会では個々人が自由主義的に自律を目指すことで規範に従属するという主体化／従属化によって、個々人の自発性の中に権力が内在化することで国家は脱中心化されると論じている。一方本書では、その理論的な枠組みをフーコーの生-権力論、統治論に依拠しながら、エスニック／コロニアルな被統治人民が、兵士になることと引き換えに超越的な権力である国家(帝国)から人権(国民権)を差別的に配分されることで自発性を獲得するという主体化／従属化の機序が論じられている。同じ理論を用いながら、主体化のプロセスと国家権力に対する位置づけが相対しているように思われるが、これはどのように理解するべきなのか。

##### 4. 包摂のレイシズム下に置かれたエスニック

### ／コロニアルな被統治人民の兵士動員を通じて獲得される階梯的かつ未完に終わる他ない主体化について

本書で援用されているフーコーの生-権力論や統治論は、「人口」概念への着目からもわかるように、統治対象である住民を統計／管理可能な集団レベルで捉えて統治する装置の成立プロセスに主眼が置かれていた。一方本書では、そうしたフーコーの理論が用いられていながらも、統治における人口（population）の問題以上に、兵士動員されるエスニック／コロニアルな人々の主体化／服従化の個別の過程に繊細に目が向けられているように思われる。本書におけるこの個別性への注目から何を見出すことができるのか。

### 5. エスニック／コロニアルなマイノリティ男性の兵士動員の固有性について

総力戦体制下におけるマイノリティの動員であれば、ジェンダー、エスニシティ、階級、地域などにおいて多様なものがありうると思える。本書は総力戦下における日系人米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士の兵士動員過程の「収斂」に着目することから出発しているので、両者の固有性については明示されていない。しかし両者の固有性があるとして考えてみると、それは決して自明ではない「祖国」のために「敵」を厭わずに殺すことのできる「内面」と技術とを持たせられる不条理とその抑圧にあるのではないか。そして本書で論じられているエスニック／コロニアルなマイノリティの兵士動員を通じた総力戦体制の分析から見えてくるのは、個人が自己の行為に責任をもつという市民社会（国民国家）における〈対等な〉主体という理念は、現実的には死-権力（死への脅し）、生-権力（生きさせること）、戦争-権力（よりよく敵を

殺せること）を通じて差別的に構築されてきたということではないだろうか。

以下、論点に即して話していきたいと思いません。

### 1. 本書で多様な分析対象と多角的な取り組みの狙いについて

本書では二つの歴史的な事象——アジア太平洋戦争時における日米の総力戦下での日系アメリカ人男性と植民地朝鮮人男性の兵士動員——が扱われていますが、それらに対する取り組みはいわゆる通常の歴史学——事実の解明や立証——のそれとは大きく違っているように思われます（付言しておけば実証が疎かにされているというのではまったくありません）。まず、歴史資料の精査が前提になってはいますが、現在と過去の証言やインタビューでいわゆる“裏を取る”ことや立証を目的としたものとは異なる提示と解釈、映画の表象や物語の分析、自伝の読解など、多様で立体的なアプローチが取られていることです。そこでは各事象が起きた経緯を解析するというよりは、そうした変容を可能にした時代の歴史的断面を描くべく取り組まれていて、こうした多様なアプローチを一貫した姿勢を保ちつつ取り組んでいることだけでも本書は稀有な研究書だと言ってよいと思います。

しかし、それ以上にユニークだと思われるのは、二つの事象を対比するべく取り上げているながら、いわゆる比較史的なアプローチが取られていないことです。本書では、日系アメリカ人男性と植民地朝鮮人男性の兵士動員の歴史的な経緯が精査され、そこから共通性と差異が取り出されて吟味されるといったようなことは行われておらず、あくまでも日米社会は並置されて議論され、各社会における動員の固有の論理がそれぞれ独立して内在的に論じられています（「エピローグ」だけは違っているよ

うです)。日米の国家がお互いをどう捉えられていたのかという議論はあっても、互いがどのようなバイアス持って認識し合い、こうした事態が生じたのかを——例えば、本書が批判的に参照しているジョン・ダワー『容赦なき戦争』のように——比較検討し、吟味するようにはなっていません。つまり本書では、超越的でニュートラルな観点から時系列に沿って双方の事象の変化をたどり、その展開を比較しつつ、分析的に解明するという比較史的な手法が〈意識的に〉避けられているように思われるのです。

とりわけ本書のターミノロジーからは、筆者が手法や方法論に対してきわめて強い意識をもって研究に臨んでいることがわかるものの、管見では本書のこの「意識」に言及してレビューしているものが見当たらず、そのアプローチの「特有さ」に触れぬまま、両対象を比較することの困難さや比較のための前提条件のずれといったものをただ指摘するものが散見されました。そこで今回の報告では、まず本書のアプローチの特有さに焦点をあてたいと思います。例えば、以下のような本書の特有のターミノロジーから、本書独特の取り組みについての〈意識〉が理解できると思われま

Contrary to this dominant view, I attempt to highlight historical convergences in the characteristics of these two wartime regimes, with special attention to their treatments of and discourses on colonial and racialized subjects. I hope to make it clear that the racial common sense of the majority populations in both wartime nations began to shift in roughly “comparable” ways. (Fujitani 2011: 8)

本書では、アジア太平洋戦争時における日

米の戦時体制において人種にまつわる事象にある「収斂」(convergence)が見られることを、相比可能である“comparable”として考察されるわけですが、注目すべきはここで“同じ”とか“比較する”といった言葉の使用が慎重に避けられていることです。実はこうした“慎重な”ターミノロジーに本書のアプローチの特有さが現れていると思われるので、以下、少々煩瑣になることを恐れず検討してみます。

まず“convergence”(収斂)ですが、一般的には複数の物が互いに異なる性質・指標などを持っている状況から変更・移行を起こし、互いの性質等の差を無くす方向に進むことを意味します。具体的にイメージしやすいのは進化論におけるそれでしょう。進化論において収斂とは、複数の異なるグループの生物が、同様の生態的地位についた時に、系統に関わらず類似した形質を独立に獲得する現象のことを意味します。例えば、魚類であるサメと哺乳類であるイルカは、まったく系統の違う動物で、発生時代や生息域なども異なっているものの、形質的・形態的にきわめて似通った発展を遂げていますが、こうしたことを収斂と呼ぶわけです。本書にあてはめるなら、総力戦体制下の日系アメリカ人と植民地朝鮮人の兵士動員を可能にした日米の人種主義的な政治体制が“異なるもの”でありながら、両マイノリティ男性の兵士動員が似通ったかたちをとったことに着目していることとなります。つまり先ほどの進化論に引き付けていえば、総力戦下において兵士動員されることになった日米それぞれのエスニック／コロニアルなマイノリティの政治生態的な地位の変化が政治環境的に似通っていること(現在からこれらの事象を似通っているとみなす我々の認識を込みで)の解明に焦点が当てられているわけです。

その意味では、来歴も存立構造も異なる日米両国の総力戦体制におけるステータスの異

なるマイノリティの戦時動員を比較することができるのか、マイノリティ動員であるならばジェンダー、エスニシティ、階級、地域などにおいて多様なものがあるにもかかわらず、なぜ植民地朝鮮人男性と日系アメリカ人男性だけが扱われるのか、種々の条件が異なる表象やテクストの分析が実証における比較と同等に扱えるのかといった本書への疑義は、ある面では重要かつ生産的な意味があるだろうにしても、筆者が本書において試みようとしたこと（なぜ両者は収斂したのか、現在の私たちはその収斂に何を読み取るのか）からすれば方向が異なるものではないかと思われまふ。ここで尋ねたいのは、そうした「誤解」が生じないように、両者の戦時動員について禁欲的に実証だけにとどまるということもできただろうと思うのですが、むしろ筆者は多様な分析対象と多角的な手法をとって両事象に取り組んでいます。先行研究を上書きすることが目的ではなく、むしろこれまでの歴史記述を定位し直し、歴史を解釈しなおすような系譜学的営為が目指されたからであり、そこには従来の歴史的な取りくみを乗り越えようという意識があるようなので、その狙いをお聞かせ願えればと思います。

## 2. 「エスニック／コロニアルなマイノリティの戦時動員を可能にした粗野な／排除のレイシズムから上品な／包摂のレイシズムへの形態変化」という本書のテーゼについて

本書では、総力戦体制下でレイシズムが形態変化したことについて以下のように述べられています。少々長いのですが、重要な箇所なのでそのまま引用します。

The wartime shift toward inclusionary practices entailed a complex recalibration of strategies for managing racialized minority and colonial sub-

jects that may be understood as a transition from what I will call “vulgar” to “polite” racism. The former was more exclusionary, particularistic, inhumane, naturalistic in its understanding of difference, antihistoricist in its denial of the possibility of assimilation (that is, the racialized were outside of history), relatively unconcerned about the health and well-being of marginalized peoples (except insofar as diseases among the abjected had to be controlled to prevent their spread to the racialized core population), and collectivist and ascriptive in racializing groups of individuals without recognizing, or with minimum concern about constituting, individual subjects. In contrast, the latter racism was inclusionary, more but not exclusively universalist, humane, relativist and more culturalist in its understanding of difference, historicist in its affirmation of the possibility of assimilation (that is, the racialized were inside history, but lagging or culturally pathological), at least minimally concerned about fostering the health and well-being of marginalized peoples, and collectivist like vulgar racism in racializing subpopulations, but different in its close attention to the systematic subjectification of individuals making up the aggregated population sets. On the last point, I mean that the strategy shifted from treating these populations as simply objects of rule, without significant interiority, to attempting to constitute them as self-reflexive and

knowledgeable subjects who would participate at least to some extent in their own regulation. (Fujitani 2011: 25)

本書ではこうした変化の原因をミシェル・フーコーの生-権力論から説明しているわけですが、ここで興味深いのは、フーコーの生-権力論が西欧の国民国家をモデルにして、人口という経済合理的な集団的住民管理の発想と、近代市民社会＝国民国家における自由な主体である個人がその原理を内面化し、従属することで可能になる自己準拠的な統治を構想していたのに対し、本書では国民国家の統治の論理が帝国におけるエスニック／コロニアルな主体へと拡張するモメントで用いられていることです。その意味で、近代社会の統治の機序の解明に取り組んでいながら、植民地主義に対する考察の欠落が批判されることの多いフーコーの議論に対する刷新と拡張が本書では試みられていることを、まず強調しておきたいと思います。

そして、本書の生-権力に関する議論では、総力戦に伴う人的資源の活用から、それまで社会の“まっとうな”構成員と見なされていなかった非主流の住民に対する人口資源管理の観点が生じ、植民地朝鮮人男性と日系アメリカ人男性は、国家のために死を賭すことと引き換えに兵士になることを通じて、両者に政治生態的な地位の変化が生まれることになったとされます。大日本帝国においては、人種主義から支配地域に格差をもたらすべく異法域に置かれていた朝鮮人への内地の法の平等的な拡張を可能にし、日本人(内地人)と同等の法的ステータスが授与される契機となります。米国では、非西欧／アジアからの移民系住民であるために、レイシズムによって“まっとう”な国民として扱われず、戦時には敵性「外国人」として(強制退去・強制収容という)違法下に置

かれていた日系アメリカ人が、主流の米国人と同等の人権が認められる契機になります。つまり兵士としての戦時動員を通じて、日帝下では支配地域に(属地的に)格差を生み出していた粗野な／排除的なレイシズムが上品な／包摂的なレイシズムに、米国では国内の「移民」に属人的に発動されていた粗野な／排除的な植民地主義的レイシズムが上品な／包摂的なレイシズムに変化したというわけです。しかしこの粗野／排除から上品／包摂的なレイシズムへの変化は、本書では上述のように「形態の変化」とされつつ様態(modality)の変化とも捉えられていて(Fujitani 2011: 87)、レイシズムそれ自体は継続していることが強調されています。

とすると、それはレイシズムの形態が排除から包摂へと移行したという歴史的な変化であるよりは、新たな社会的条件が生じたことによって、レイシズムに「包摂」という新しい様態(modality)が付加されて多面化したという理解の方がよりふさわしいのではないかと。そうであれば例えば、本書の読者の多くが想起するだろう戦後の日米のレイシズムの分岐についても考えることができるのではないのでしょうか。アジア太平洋戦争時、アジアにおける覇権の正当性を競う日米両帝国は、人的資源の活用という総力戦体制下の要請によってマイノリティを動員するために「包摂」という新しいレイシズムの様態(modality)を作り出したわけですが、戦後のアメリカは東西冷戦下で第三世界に対して自らの覇権の正当性を訴える必要から包摂的な(多文化主義的な)レイシズムを維持した。一方日本は、戦後に植民地を手放しつつ米国の庇護下に置かれたことで、戦前の包摂的な(共栄的な)レイシズムを維持する必要がなくなり、(在日台湾人・朝鮮人などへの処遇に典型的な)粗野な／排除的なレイシズム一辺倒になったという理解ができるように思

うのです。

ただし排除から包摂へと様態が変化したということは、様態の変化を担保する同一性を保持していることになるわけですが、そのレイシズムの同一性、明証性とはいかなるものであるのか。おそらく現代において繁茂するリベラルなレイシズムに連続するものとして包摂的なレイシズムは考えられていると思われるのですが、それは第二次世界大戦までの文明論に基づいた「野蛮人」の教化（帝国主義イデオロギー）と変質者（退化した者）の増殖による社会の劣化からの防衛（優生思想）とを合理化するレイシズムといかなる連続性を持つのでしょうか。

### 3. エスニック／コロニアルな被統治人民の主体化と国家権力の関係について

本書では、総力戦体制下で両国のレイシズムが排除から包摂へとその形態／様態を変えたのは、死-権力（死への脅し）、生-権力（生きさせること）の発動だけでなく、政治におけるリベラリズムにも関わることが論じられています。

Yet there was another factor leading to America's disavowal of vulgar racism and turn to its more polite form that Foucault's general framework for biopolitics and than a to politics does not allow us to see. The questions of who should live and who should die, of who should count (or more precisely, be counted) so as to receive the material and spiritual benefits of liberal democracy and the nation, including the right to die as soldiers. (Fujiani 2011: 82)

排除的なレイシズムが包摂的なレイシズム

へと移行するにあたっては、死-権力（殺す権力）、生-権力（生かす権力）の発動だけではなく、リベラルな統治が作用したというわけです。ただし、ここでのリベラリズムは、フーコーがホモ・エコノミクスの誕生を通じて論じたような個人の（経済的）自由を最優先させる自由主義ではなくて、民主主義的市民社会存立のためのもう一つの軸である「平等」に関わるものだと思います。フーコーは（経済的）自由主義の浸透によって個人が自律しつつ規範が内在化されて超越的な権力／主権が分散する事態を論じています。こうした社会では、否定されるべき「他者」は（ナチスのショアーが念頭にあるようですが）そうした主体化を行えないもの、阻害するものとして市民社会から析出されて排除され、その選別において作動するのがレイシズムだと考えられているようです。しかし、本書ではむしろ国家が人権（国民権＝国民として平等である権利）を「国民であることの（不）十分さ」に応じて階梯的かつ差別的に配分することで人民を統治する超越的な装置になっていることが、論じられているようです。国家が差し出す人権（国民として自身の欲求と意志を行使できる権利）に授かることで、主体化されつつ従属化されることとなります。そして、この「国民であることの（不）十分さ」の階梯的かつ差別的な配分認定を可能にしたのが包摂的レイシズムというわけです。

ここでは主体化のプロセスと国家権力をめぐり、フーコーと著者ではある意味対極の立場をとっているように思えますが、それは平時の自由主義的な市民社会（夜警国家）をモデルにするフーコーと、形式的には「平等な」人権配分を統治の原理とする国民帝国の総力戦体制（福祉国家）を考察している著者との違いなのでしょう。報告者自身は、本書の国民帝国における人権配分の装置というものが近代国民国家の統治モデルとしてより説得力を持つ

ように思うのですが、著者にこの点を尋ねてみたいと思います。

#### 4. 包摂のレイシズム下に置かれたエスニック／コロニアルな被統治人民の兵士動員を通じて獲得される未完に終わる他ない主体化について

本書で援用されているフーコーの生-権力論や統治論は、「人口」概念への着目からもわかるように、集団レベルでの特性を統計的に把握し、その全体的な調整を行うことで、その集団内の個々人を生かす統治装置の成立機序に主眼が置かれていました。一方本書では、そうしたフーコーの理論が用いられていながら、むしろ兵士動員されるエスニック／コロニアルな人々の〈達成されることのない〉主体化／服従化の個別の過程に目が向けられているようです。フーコーの主体化／従属化の議論がある種仮説演繹的に行われるためにメカニカルに論じられているのに対し、本書では収容所の日系人たちの忠誠質問に対する種々の反応や反乱、積極的に同化を受け入れて主体化をはかるエスニック／コロニアルな人々のふるまいや言説、朝鮮人の元徴募兵とその妻へのインタビューなど、その複雑な実際の過程を丁寧に掬おうとしています。

ここから私が感得するのは、近代社会におけるエスニック／コロニアルな人々の主体化は、そうした規定を前提にしては決してメカニカルに行われることはなく、ある意味必ず失敗するのではないかということです。本書で焦点を当てられているマイク・マサオカにしても、一見見事に同化させてみせているように思われるものの、本書における彼の自伝の読解からわかってくることは、本人の自意識がどうあれ、その同化は人種化の否認を通じた「宗主国人であること」のミミクリーであり、カリカチュアであって、市民社会における個々人の対等性と

という意味での主体化ではないと感じられます。本書では、マイク・マサオカのような「怪物」を作り出す包摂的なレイシズムへの批判はもちろんですが、その包摂による主体化に〈失敗する〉エスニック／コロニアルな人々への注目を通じて、(正しい言い方かどうかはわからないのですが)これまでの同化、協力者(collaborator)、統治者／非統治者、脱植民地化、植民地主義、ナショナリズムといったターミノロジーが持ってきたインプリケーション、コノテーションとは異なる位相で“コロニアルであること”をとらえようとしたのではないかと思えるのですが、どうでしょうか。

#### 5. エスニック／コロニアルなマイノリティ男性の兵士動員の固有性について

総力戦体制下におけるマイノリティの動員であれば、ジェンダー、エスニシティ、階級、地域などにおいて多様なものがありうるわけですが、本書で取り上げられている日系人米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士に他にはない固有性があるとすれば、必ずしも自明ではない「祖国」のために「敵」を厭わずに殺すことのできる「内面」と技術を持たせられる不条理にあるのではないのでしょうか。フーコーは『社会は防衛しなければならない』のなかで、これから取り組もうとしている戦争論の構想について次のように述べています。

権力とは戦争である、他の手段によって継続された戦争である、と。このときはわたしたちはクラウゼヴィッツの定式を逆転して、政治とは他の手段によって継続された戦争であると考えることになります。これは三つのことを意味します。まず、私たちの社会のような社会において機能している権力関係はそもそも歴史的に確定可能な一時期に戦争の中で、また戦争に

よって、確立された一定の力関係に根ざしたものであるということ。そして、政治権力が、戦争を停止し市民社会に平和をもたらす、あるいは平和をもたらそうとするのは、戦争の作用を中断する、あるいは戦争の最後の戦いで現れた不均衡を中和化するためには全くないのだということです。この仮説に立つならば、政治権力の役割は、一種の静かなる戦争によって、諸制度、経済的不平等、言語、そして各人の身体にまで、この力関係を継続的に記入なおし続けるものだけということになります。これが「戦争は、他の手段によって継続された政治である」というクラウゼヴィッツの箴言の逆転に与えられるべき第一の意味です。政治とは、戦争において現れた力の不均衡の承認と更新である、というものです。このような命題逆転は、別なことも意味する。すなわち、この「市民平和」の内部において政治闘争や、権力に関する、権力に対する、権力のための構想や、力関係の変更——一方の側の増大、転覆など——、そうしたすべては戦争それ自体の逸話であり、戦争の断片化、および戦争の転移であると解釈されることになるのです。平和とその諸制度の歴史を書くときにさえ、ひとは戦争の歴史を書くだけなのだということになる。

クラウゼヴィッツの命題の逆転にはまだ第三の意味があります。それは、最終的決定をくだすのは戦争である、つまり、最終的には武器が審判を下す力の対決が決めるのだということ。政治的なものの究極の姿は最終戦争であって、最終戦こそ、最後に、そしてまさしく最後にのみ、継続された戦争としての権力の行使を停止するものということになります。〔中略〕

社会は、その政治構造において、或る

ものたちが他のものたちに対して自分たちを防衛するように組織されている、あるいは、他の者たちの犯行に対して自らの支配を防衛するように、あるいはまた単に自分たちの勝利を防衛し、服従化をとおして勝利を永続化するように組織されているのだ、という主張なのか」

(フーコー『社会は防衛しなければならない』pp.19-22.)

フーコーの戦争論はこれ以降展開されなかったのですが、本書ではそれが意図されざる形で展開されているように思われるのです。というのも、本書で論じられているエスニック／コロニアルなマイノリティの兵士動員を通じた総力戦体制の分析から見えてくるのは、個人が自己の行為に責任をもつという市民社会における〈主体〉という理念が、総力戦体制を経由して、死-権力(死への脅し)、生-権力(生きさせること)、戦争-権力(よりよく敵を殺せること)のもと、社会は国家化されて、完成されたように思われるからなのですが、どうでしょうか。

少々駆け足の報告になりましたが、以上で終わります。

## 09 水谷：

李さん、ありがとうございました。それでは、引き続き中野さん、お願いいたします。

## 10 中野敏男：

それでは、お二人に続いて、私から少しコメントしたいと思います。どうして私がここでフジタニさんのご本にコメントするか、あるいは、その依頼を引き受けているかを考えますと、増渕さんからもおっしゃっていただきましたけれど、総力戦体制論ということの歴史、その中にこのご本もあると見ることができから

だと思います。私自身が、その総力戦体制論を引き受けながら、もう30年以上になりますが、考えてきた経緯があります。ですから、増淵さんがそうおっしゃってくださったように、私自身もこのご本をその同じ流れの重要な成果の一つだと考えたいわけです。そのことが、つまりこのような重要な成果が生まれたこと自体が、まずはありがたいし、喜びだと同時に、それはさらに元にある総力戦体制論の意味の広がりや問題点まで考えさせてくれるきっかけともなりました。そうであれば、そういう立場からこのご本について何かお話をすることが出来るだろうし、それは必要でもあるだろう。そんなふうに考えて、コメントをお引き受けすることになったのです。

ですので、日米の帝国の比較というのがこの本の中心軸になるでしょうが、アメリカの帝国を正面から論ずるのは、私の守備範囲というか、考えてきたこととだいぶ離れてしまうので、日本の総力戦体制、その植民地主義を考えてきた立場から、この本がどう見えるかという点に議論を絞らせていただいて、その観点からお話をしようかと思っています。

で、総力戦体制論との関係で、そのつながりで言うと、最初に少し申したいのですが、私自身はそれを引き継いだと同時に発展させましたと思っています。増淵さんもそう言ってくださったのですが、その発展の部分で悩みというか、考えてきたことがございます。ですから、その観点から見る時に、フジタニさんのご本はどうだろうかと思ってしまう。

総力戦体制論の発展ということですけど、その起点に、総力戦体制論がその始まりの形は先進国の比較政治体制論だったということがあります。それは、総力戦に向かう先進国、つまり西欧やアメリカやロシア、そして日本の戦争体制の比較であって、はじめの時点では植民地の問題が視野から抜けていたわけです。

だからそれは、帝国主義の問題、その植民地主義の問題に視野を開いて捉え直されなければならない、そういう連関をふまえて少し変容させなければならない、ということがありました。

それはかなり明らかなのだと思いますが、総力戦体制論というのは、一つの社会がどのように構成されているかを問うという意味で社会体制論なのですね。そのときに、この社会体制論をまずは思想のレベルで考え直すということがとても重要な問題となりました。議論の中心にいた山之内靖さんの言い方を借りれば、「階級社会からシステム社会への転換」ということですが、まずはこの社会体制の転換という点に注目して総力戦体制は語られていた。これに対して、そのとき同時に思想の問題が非常に重要ではないかとまず考え始めたのです。

そのときに思想の問題と考えていたのは、ここで議論されているようなレイシズムの問題でももちろんあるのですが、それを植民地主義の問題として捉えた。総力戦体制をもって植民地を拡張していくというのは、総力戦体制の外部に植民地を単純に接合していくという対外政策のことだけの問題ではなく、社会構成の思想そのものの問題として捉えなければならないと考えたのです。「システム社会」と言ってしまうと一つの社会の機能連関だけが浮き出てきますが、総力戦体制は人間をカテゴリー化して従属させる「植民地主義」をもって内外に拡張しているという見方です。そうであれば、「熱戦」としての戦争が終わっても、政治支配としての「植民地支配」そのものが終わっても、それだけでは「植民地主義」という社会構成の思想の問題は終わらない。そう考えると戦後における「植民地主義の継続」ということがまた視野に入ってくるので、その連続を考えるうえでも「植民地主義」の思想の問題がとても大切だと気づいたわけです。

要するに、総力戦体制論を、先進国の社会体制比較論という枠組みから帝国の植民地支配の問題に視野を広げて展開する、その時に同時に思想の問題を意識して捉える、この二つの側面をかなり考えた経緯があって、そういう観点から見たときに今日の主題である『共振する帝国』の議論はどうなのか考えたところがあるので、今日はそれをお話することになると思います。

レジュメを見ていただきたいのですが、そういう意味で、最初のほうは総力戦体制論、国民主体の動員という観点から、かなり共感し、なるほどと、このように議論が展開できるのかというふうに思いながら、いちいち膝を打ちながら読んでおりました。レジュメには、共有できる基本認識として二カ所引用しています。

「国ごとに具体的な相違点はあるものの、第二次世界大戦の最も重要な遺産のひとつは、レイシズムとその否認がおさまりの悪い相互置換性をそなえながら、絶えず私たちにつきまとうてきたことである。」(エピローグ12)

「朝鮮人と日本人が対等になれる機会があるという前提こそが、異なるとみなされた人々、あるいは無関心で期待に応えないとみなされた人々に対する非道な扱いを正当化したのである。」(第8章37)

これらの点は、そうなんだろうというふうに思っています。戦時の植民地支配というのはそのように、「レイシズムの否認」、「対等になれる機会がある」、そういう前提がなにがしかはあり、それにより暴力が正当化されてもいた。この認識は共有いたしました。

そこで、考えたい注目点なのですが、二つのこと、すなわち一つは統治政策、つまり政策

上の問題と、それからもう一つはレイシズムの問題ですが、これらはどのように関係するののかという問題です。そこのところを少し丁寧に考えたいなと思っています。どうも政策上の問題とレイシズムの問題というのは、非常に巧妙に絡んでいて、議論する時にその区別がよくわからなくなることがある。政策の問題とレイシズムという思想の問題とは、重なるのだけど、違うという両面があって、そこを丁寧に区別しないとまずかろうということです。私の考えでは、そこに、基本的には先ほどから議論に出てきている「粗野なレイシズムから上品なレイシズムへ」というテーゼが絡んでいると思うのです。

「粗野なレイシズムから上品なレイシズムへ」というテーゼですけど、それを統治政策という意味で見ると、政策が一面では上品になるというか、様相を変えるというのは事実で、非常に納得のできる場所です。そこには、よく言われることですが、武断政治から文化政治へ、そして内鮮一体論へという変遷があって、朝鮮の統治政策が戦時に向かって全体としては「同化」の方向に変化していったというのは間違いないことでしょう。ですからこのテーゼは、統治言説の変化として見るなら、適切な指摘であると思います。

もっとも、統治政策を見る場合でもその実際に立ち入って検討するならば、これは増淵さんがおっしゃったことと関係すると思いますが、誰に対する統治政策なのかで事態は随分変わっていると思います。すなわち、社会層や地域によって政策の実際は異なるということです。つまり、統治政策を全体的に見る場合には「内鮮一体論」の方向に変化していて、粗野から上品になったと言うこともできるのだけど、しかし他方で、地域とか、下層とか、女性とか、そういう統治の対象を区別して丁寧に見ていくと、むしろ暴力的で過酷になっている、その意味で粗野になっていると見なければならぬ

ことがさまざまに出てくる。「粗野から上品へ」と言っても、そのような事態とセットになっていることですから、統治政策を見る場合でも、そのあたりのことに注意する必要があると思います。

それを前提にして、次に植民地主義の「思想」を考える時には、本当に「粗野から上品へ」と言えるかについて、さらに疑問が広がってくると言わなければなりません。それは私が思想史を専門にしている、まずは思想レベルでさまざまに考えてしまうところがあるわけですが、その「思想」について考えると、日本では「粗野から上品へ」という図式がそもそも成り立たないのではないかと感じています。

日本の思想史ということですが、その枠で考えると、「レイシズム」というのは、どちらかといえば「高級な外来思想」として、つまり「高級で知的な思想」として幕末・明治初期に学ばれているというのがやはり正しいと思うのです。レジュメでは吉田松陰と福沢諭吉とをその例として挙げていますが、ここではその内容には立ち入りません。確認したいことは、まずは当時のそういうハイレベルな知識人たちが持ち込んだ思想として「レイシズム」はあって、それが上から影響を与えたということです。吉田松陰と福沢諭吉ですから、その思想が当時の知識人や政治家たちに大きな影響を与えたことは間違いなく、それを人びとは教養ある先端知として学んでいるのです。すなわち日本でレイシズムは、思想レベルでは、「粗野から上品へ」というより、むしろ「高級な思想」として導入されていると言えるのではないかと感じます。そうだとすれば、日本の思想史上の事実、そのテーゼとは随分ずれているように感じます。

そうすると、そうした思想史上のことと植民地統治の政策上のこととの関係がどうなっていたのかが問題になってきます。「レイシズム」というのは、単なる観念なのではなく人間集

団の実際上のカテゴリー化とそれにもとづいた差別・排除という作動が伴うものでしょうし、また逆に単なる排除の行為・作動そのものだけなのでもなく、それを正当化する観念が伴うものとも考えるべきでしょう。そうだとすれば、しかも、そこに書いたように、時期とか、階級とか、性差とか、場所とかさまざまな多様性を持った点、具体的な事実としていわざるをえないので、そういう具体的な関係において、レイシズム、全体を組織する思想としてのレイシズムがどのように現れていたかが、一つ問題になると思うのです。すなわち、統治政策として「同化」の方向に進んでいるといっても、それが人びとの接する具体的な現場でどのような形で現実化していたのかが、実際に生きている人間たちにとっては切実なことであつたはずで、つまり、レイシズムというのは具体的な現場でレイス (race) が作られるわけですから、レイスを作るほうと別なレイスにされるほうとの、その場での相互関係が問題になると思います。

そう考えたときに、実際の事実として非常に重要なことだと私は思っているのですが、植民地支配が1945年に終わったときに、まずは朝鮮人の側が日本人との関係をどう受け止めていたかという問題ですね。そのときに、実際の意識としてレイシズムが「上品」になっていたなら、朝鮮人の側からも日本人になろうという声、つまり、自分たちは日本兵士として戦い、また日本人になろうともしてきたのだから、当然、その志向を維持して日本人になった方がいいのだという、そういう声はなにかは起こるだろうと考えられます。そういう朝鮮人が現れてもおかしくはないはずで、ところが、そうじゃなかったというのが歴史的な事実だと思えます。特にその時に日本にいた朝鮮人たちについて、彼らが日本の敗戦で最初に思ったことは恐怖だったと、よく言われています。恐怖とはどういうことかと問うと、戦争の

終結とともにただちにそれほど遠くない過去の関東大震災における大虐殺が想起され、実際にそのようなことを日本人たちが始めるだろうと感じられて、それを恐怖したわけです。そのときその場にいる日本人たちについて、朝鮮人たちはそのように感じていたということです。だから一目散に逃げ帰るといふ、そういう方向が基本的な流れだったと私は理解しています。それとは逆に、「日本人」として戦った兵士たちが、自分たちは命をかけて戦ったんだから、当然、日本人になる権利はあるんだという主張がほとんど出てこないっていうのは、この時の朝鮮人から見た日本人の見え方、そこに孕まれている問題が当然関係しているだろうということです。

それから、もう一つ、これはいま述べたことの裏側でもありますが、レイシズムというときに、この場合は誰が主体なのかという問題がやはりあると思います。統治者というか、政治支配者たちのレイシズムということがもちろんまずあるわけで、その思想については先ほど述べたように教養ある先端知として広がったと見ることができると思うのですけれど、その他方で、日本においては民衆のレイシズムという問題が、あるいは民衆の植民地主義というのが、それとは別に考えねばならない課題として大きいと思います。私自身は、そのことを課題にしてずっと考えてきたようなところがあって、フジタニさんのところ〔トロント大学〕でそれについて発表させていただきましたが、『詩歌と戦争』という本を書いたのも、実は民衆のレイシズムというか、そんな民衆の関与の問題を考えたいという強い関心から始まっています。

で、それを考えていくと、日本人としての国民意識の形成ということとレイシズムの成長がセットになって進んでいると考えられるわけですね。ちょうど明治20年代と1920年代とい

うのが二つの目安になる時期なんですけれど、まずは明治20年代に明治憲法ができて、国家体制が整えられ、地方制度も整備される。そしてちょうどそのときに日本民謡ブームがおこって、「地方」の意識が成立する。そのようなことを『詩歌と戦争』で書きましたけど、その頃までは「おらがくに」とか、「おくにはどちらですか」とか言うとき、その「くに」はそれぞれの出身地方を指していた。そんな「くに」の全体集合が意識されるのが、だいたい明治20年代ですね。それからいくつかの戦争と植民地の拡大を経て、つまり日清、日露、第一次世界大戦の三つの戦争と韓国併合を経て、関東大震災と大正デモクラシーの1920年代に国民統合があらためて明確に意識されるようになる。つまりこのときに、日本人という意識、朝鮮人じゃなくて日本人だという強い意識が定着していく。すなわち、日本人が国民統合されるというのはそんなに古い話ではなくて、この1920年代ぐらいのことなのだろうと。そして、この国民意識と日本人民衆の中におけるレイシズムの定着がセットになっている、というのが主に詩歌という文化現象をとおしてみた私の見方です。

つまり、粗野なレイシズムがもともとあったということではなくて、国民意識が形成されるのと併行して、その国民意識の裏面にレイシズムがむくむくと成長する、あるいは、レイシズムを不可欠な要素として国民意識が形成されるという、そういう経緯が1920年代にあって、そのことが30年代の総力戦体制の基盤を準備する、そのように私などは考えているわけです。ですから、植民地の統治政策のレベルで見ると「同化」への志向が強くなる、その意味で「上品」な方向に進むというのは、確かなのだけれど、その前に日本の国民の中に「粗野なレイシズム」があって、それが「上品」に変わったとは捉えにくい。つまり、粗野なレイシ

ズムがもともとあったというよりは、国民意識の形成と同時にレイシズムが1920年代に形成され戦時に向かって強化されていく、そういうような流れで見たほうがいいように思われるので、その見方から見ると、この本でおっしゃっているレイシズムというものが「粗野」なものから「上品」なものになったという変化の認識は、国民意識のレベルでは少し理解がしにくくなってしまっていると感じています。

特に戦時動員の兵士たちのレイシズムの話ですけども、その頃から頻出する日本語の表現として「それでも日本人か」というような言い方がありますね。実際にいつ頃から多用された表現なのかは確かではありませんが、私が子どもの頃にもそんなことを言ってる大人がたくさんおりました。「それでも日本人か」というのは、言い換えると「日本人としての主体たれ」ということになるでしょうが、そういう呼びかけが日本人の中に生まれて、それが「軟弱なもの」「劣ったもの」を叱咤する主体形成の表現として多用されるようになる。するとそれが、外れる者、外れていると見える者に対しては容赦のない攻撃になっていて、20年代から30年代に向かって日本人への国民化の呼びかけられるときには、日本人になるべきなのに日本人性で劣る朝鮮人に向けられる場合にいつそう厳しい要求をつきつける言説になっていく。「それでも日本人か」という言い方は、日本人の間でもそう言っているわけですから、統治政策において「内鮮一体」が言われて、新たに日本人の中に包摂されるべきだとされる朝鮮人に対してであれば、それはより厳しいレイシズムのまなざしにならざるをえないだろうと思うのです。

このようなことで、総力戦体制への動員が進む中で、朝鮮人に対するそのレイシズムのまなざしはむしろ強化されていると、私には見えています。とりわけそのことは、民衆における

ナショナリズムとレイシズムのつながりという意味から重要で、朝鮮人の統治においても、そのまなざしを朝鮮人にも内面化させようとする努力としてはっきり現れています。例えば、大和塾など皇道精神の鍛錬を標榜する試みがあり、日本語の強制も強まったという事実などは、戦時下に向かってレイシズムがいよいよ乱暴に強化されていくことと関係があると、私は思っています。

そして最後に、その継続、つまり植民地主義というのは植民地の領域的統治だけじゃなくて、そんな植民地統治が終わっても植民地主義は継続するという見通しから考えてみたいと思います。それで最初に戻るわけですけど、何で日本人がともに戦っていたはずの朝鮮人をすぐ忘れられたのか、あるいは、それを逆にいえば、朝鮮人も日本人として命をかけたはずなのに、戦争が終わってから日本人という自己主張を強くする人がなぜたくさん出てこなかったのかという問題で、この点は非常に重要だと思います。

それはやはりレイシズム、つまり、統治のレベルではある種の包摂を進めながら、同時にレイシズムとしては排除的な、厳しく恐怖を起こさせるような、そういう思想の強化というのが戦時中に進んだことの表れではないかと思っています。そういう意味で、統治政策と思想としてのレイシズムの区別と連関をしっかりと考えることがとても重要だと思っていて、そのあたりについてフジタニさんはどうお考えなのか。あるいは、今回のご本でお示しの認識図式の中にこのあたりはどのように組み込まれ考えられているのかを伺いたいです。以上です。

## 11 水谷：

中野さん、どうもありがとうございました。それでは、ここで少し休憩を取りたいと思いま

す。ただ、できるだけ討論に時間をたっぷり使いたないので、10分間の休憩とさせていただきます。それでは一旦、ここで休憩に入ります。

### 《休 憩》

それでは時間になりましたので再開させていただきます。第2部ということで、これからディスカッションに入っていきます。まず、フジタニさんのほうから10分、15分ぐらいかけてレスポンスをいただきまして、その後、討論に入っていきたいと思っております。それでは、フジタニさん、お願いいたします。

#### 12 フジタニ：

ご報告どうもありがとうございます。本当に充実したご報告をいただきましたので、うまくレスポンスできるかどうかかなり心配です。議論の点がかなり多いので、その一部にしか答えられないと思っております。本当はそれぞれ1時間ぐらいずつつけてレスポンスしたほうがいいと思いますが、10分から15分でと言われたので、できるだけ簡潔に、中野さんの報告を中心に、報告者の共通の関心のようなところから始めたいと思っております。そして、残り時間によって、もっとそれぞれの発表について個別的にレスポンスしたいと思っております。

まず一つの面は方法論ですね。方法論、手法の問題で、特になぜ相対可能とか、なぜ収斂とか、そういうふうな概念をあえて使って、普通というか、常識的な比較研究とか比較歴史とか、そういう実証的なやり方でやらなかったのかという問題だと思っております。まず一つ、これも皆さんも評価して下さったと思うのですが、この本はやはり事実に基づいた本で、想像して作った話ではありません。ただし、なぜこんな概念を使ったかという、事実とか資料はしっかりと踏まえたうえで、しかし実証主義的な視点にこだわら

ずに、いわゆる「実証」を超えた歴史を書きたいと思ったからです。普通は比較研究とか比較史を考える場合、二つの似通ったものを超越的な一つの立場から、その違いとか似てるところとか、そういうふうなことを指摘することが多いと思うのですが、私はそういうふうなやり方を拒否したかった。そういうやり方をフーコーが批判していますが、実際にあった過去、あるいは、ありのままの過去を書くという、そういうふうな history as it was を書くというふうなやり方ではなくて、むしろ、現在に有用な歴史を書きたかったんです。つまり、政治性を十分に含んだ、中立的な立場ではない、超越的な立場でもない歴史を書きたかった。フーコーの言葉を借りれば、これは日本語でどのように訳されているかわかりませんが、今の歴史 (history of the present) そして、ナショナリズムを拒否したうえで歴史を書くということでした。

なぜそういうふうなことをやらなければならなかったのか、どういうふうな今の歴史を書きたかったのかというと、それはアメリカ合衆国に圧倒的な支配権を持つよき戦争のストーリー、その物語を批判したかっただけではなく、日本帝国を肯定的に書きたがる、記憶したがる日本のナショナリスト、新ナショナリストへの批判でもある。ですから、その二つの帝国の比較可能なところを取り上げて、両方を批判するという、あえていえば、ポストナショナリストな歴史の書き方を試みたわけです。

収斂という言葉ですけど、多分、これは李さんが言ってくださったことだと思いますが、なぜこの二つの過去が収斂していったのかという問題ですね。で、これは単純に言えば、国民国家と国民帝国という形態を取ったのは、資本主義、近代の世界システムで構築したからであって、世界システムの中の二つの、個々の帝国が形成することによって、当然、共通性とか収斂性も出てくるわけです。しかし、ナ

シヨナリズムの狡猾<sup>こうかつ</sup>さの結果、われわれはいつも自分の国はユニークであって、特殊性があると思ひ込むようになってきていると思ひます。それで、そういうポストナシヨナリストな手法で二つの帝国を取り上げたいと思ひました。

そしてまた、さらに大きくいえば、私の考えでは——私だけではないんですが——第一次世界大戦と第二次世界大戦は、プレイヤーこそ代わりましたけど、実は一つの戦争、帝国間の戦争であって、帝国のどっちがよりよいかとか、どっちのほうを優先的に考えなくてはいけなとか、肯定的に考えなくてはいけなとか、そういうふうな議論を避けて、むしろ批判して取り上げたわけです。やっぱりアメリカのほうがよかったとか、日本のほうがよかったとか、日本の帝国のほうがヨーロッパの帝国より優しかったとか、そういうふうな言い方ではなくて、どの帝国でもこの二つのレイシズム、粗野なレイシズムとか上品なレイシズムを用いて、植民地支配していたということに思ひいたったわけです。

これと関連して、また手法の問題ですが、これは多分、増淵さんが最初に言われたと思うのですが、軍隊という特殊な空間を取り上げている意味ですね。果たして別の空間、階級、性別に分けられた人たちを対象にした場合、私の分析が妥当かどうかという問題を中野さんも李さんも指摘していたと思ひます。私は軍隊という空間を、ある意味ではフーコーが監獄の空間を理解していたように使ったつもりです。つまり、フーコーにとって監獄は監獄だけの問題ではなくて、近代の権力関係を表す図式として扱ったのです。より大きな広い社会の図式として、理想的な図式として、フーコーは監獄を分析したわけです。私の場合であれば、軍隊という空間は国民国家の理想的な図式の例になると考えます。それを裏づける一つの証拠は、戦前の軍隊の言葉では軍隊以外の

外の空間はすべて「地方」という呼び方があったわけです。つまり、一般社会は地方であって、軍隊内が国家の中心、国民国家の中心である、そういうふうにかんがえていた。もちろんあくまでも図式であって、それが完全に実際の空間に当てはまるかどうかはわかりませんが、それは大きな問題としてあつて十分に研究されていないと思ひます。

次はまたすごく大きな問題ですが、粗野なレイシズムと上品なレイシズムの関係にもうちょっと説明を加えたいと思ひます。これは多分、中野さんが一番問題にしていたと思うのですが、私の説明が不十分だったかもしれないので、もうちょっと丁寧に私の意図を話します。

中野さんが言われたとおり、地域、階級、性別によってレイシズムにはかなりの違いがあったと思ひます。これは、つまり戦時中には粗野なレイシズムから上品なレイシズムへの変動、そのシフトは始まったばかりであつて、戦時中に完成したわけではなく、徹底的に遂行したのは部分的であつたと思ひます。中野さんの言葉を借りれば、上品なレイシズムの思想を信じていた人たちもいたでしょうが、完全には信じていない、半信半疑でいた、あるいはずっとそのままの粗野なレイシズムを信じて行動していた人ももちろん多かつたでしょう。一方で、総力戦体制の末期には上品なレイシズムの思想自体はかなり広く流布していたと思ひます。

それに関連してですが、確かに中野さんが言われるとおり、敗戦直後に自分は日本人であると主張する朝鮮人は少なかつたでしょう。しかし、反歴史的過程(counterfactual history)には問題はありますが、あえていえば、もし日本帝国が戦争に勝っていたら、朝鮮人からのそういう声もより大きかつた可能性は十分にあつたと考えられます。日系人を考える場合、

日系アメリカ人は収容所に入れられた時、志願する男は比較的少なかったわけです。けれども、戦後直後、また、自分はアメリカ人であることを証明しなくてはいけない時に、あたかもみんなが忠誠であったかのように語るようになって、それが主要な日系人の語りになってしまったわけです。

で、その反面、これは皆さんも同じように考えていると思いますけれど、アメリカが多民族帝国、あるいは多民族国家に達したのは、戦時中ではなくて戦後です。戦争に勝ったがゆえに、戦時中に主張した多人種平等の約束を戦後に果たさなければならなかったわけです。多人種平等の思考は総力体制下で植えつけられ、十分に定着したのは戦後の1950年代の終わりから60年代の初め頃だと思います。ですから、繰り返しになりますが、もし日本が勝っていた場合は、朝鮮人も同じ状況にあったような可能性も十分にあったと思います。

もう一つ、言いたかったことがあります。皆さんも理解されていると思いますが、粗野なレイシズムと上品なレイシズムとが同時に折り重なり、同時に存続してきたことを言いたかったわけで、上品なレイシズムが完全に粗野なレイシズムに変わったと言いたかったわけではありません。粗野なレイシズムはきっかけがあれば常に台頭してくるに違いないのです。

そこに関連してくるのが、なぜ朝鮮人が日本人と一緒に戦って戦争に参加したのに、戦後、その朝鮮人も国民同胞であったことを簡単に忘れられたのかという問題です。簡単に不都合な過去を忘れるということは歴史上かなりたくさんある例があると私は思います。戦後、日本が敗戦して帝国を手放さなければならぬことで、上品なレイシズムにこだわる物質的な理由は全くなかったように思います。物質的な価値があれば何でも記憶に残りますが、その要因がなければ割と簡単に忘却して

しまう例はたくさんあると思います。失業率が高い戦後の日本では、単一民族であったことを想像することが都合がよかったのだと思います。それを契機に、排他的かつ粗野なレイシズムが台頭することになったわけです。ただし、もう一つ、言わなければいけないことは、簡単に戦前の植民地状況に逆戻りはできなかったことです。戦後の日本が新しいポスト・ホロコースト世界システムに組み込まれた時、全世界では文明国はみんなレイシズムを否認しなければいけないということがあって、日本もその例外ではなかった。だから何らかのかたちで、そういう上品なレイシズムと、時々表に現れてくる潜在的な粗野なレイシズムのどちらもが存続したのだと思います。

また、その朝鮮人が一緒に戦争に戦ったという記憶は、簡単に忘れられると言いましたが、完全に消えさることもないと思います。それはありえない。フレドリック・ジェイムスの概念を借りれば、その記憶は政治的無意識 (political unconscious) として常に存続しているに違いないものです。その政治的無意識とは居心地の悪い、抑圧された歴史のことです。そういう歴史の潜在意識は、完全に消せるものではないので、いまだに現れてくることもあります。一つの例を挙げれば、靖国神社に台湾人や朝鮮人が祀られています。そういう矛盾が政治的無意識の中にあるような気がします。

それで、中野さんが言われる、政策と思想との違い、そこにはかなりのギャップがあるのではないかということですね。私も同じように思います。国家の政策による思想への効果もあると思います。例えば、移民法とか国籍法とか、そういう法律が国家レイシズムの道具であり、そういう法律などによってレイシズムが構築される、あるいは再構築されることも多いと思います。例えば、国籍に入れることはできな

いとか、そういうふうなことです。ですから、もちろん思想の問題も大事だと思いますが、今回の書物では思想まで扱うことはできませんでした。これから考えなくてはいけない課題だと思います。

また、そのことと関連していると思うのですが、民衆のレイシズムに関しても、やはり民衆意識と国家の政策、植民地の政策にかなりのギャップがあったはず。でも、これは日本だけではなく、アメリカの場合もそうです。例えば、戦後まもなく日系人が戦争で戦ったにもかかわらず、自分のコミュニティに戻ることができず、また暴力を受けるということもありましたが、その潜在的な粗野なレイシズムはもちろんいまだに続いています。ですから日本でもアメリカでも、そういう粗野なレイシズムから上品なレイシズムへの移行、その動きにはやっぱりいろんなギャップがあったに違いないのです。しかし、その違いも相対可能な相違だと言えるように思います。

最後にもう一つだけ付け加えますと、三人のご指摘にもありましたが、この本でできなかったことはもちろんたくさんあったと思います。その一つにはマイノリティとマイノリティの間の関係の分析です。つまり私が本書でこだわったのは、マイノリティあるいは植民地化された人々と国家またはマジョリティとの関係ですが、むしろマイノリティとマイノリティ、あるいは植民地化された人々同士の関係も、これからもっと研究しなければいけないと思います。そして、特に今、Black Lives Matter の状況では、アジアのマイノリティとアジア・アメリカンのマイノリティと黒人がどのような関係を持ち続けてきたかということをもっと研究しなければいけません。一つだけ例を挙げて終わりにしますが、日系人がリトル・トーキョーから収容所に退避させられた時に、黒人の人々とか、貧しい人々が、その日系人が住んでた

ところなどに入ってくるわけなんですね。そしてその日系人の街がブロンズ街と名づけられるようになります。要するに、有色人種たちが日系人たちが住んでいた場所に住み始めたのですが、日系人が収容所から解放されると、黒人の人々たちがかなり速やかに他のところに移って、日系人が問題なく元の場所に戻ることができたということがあるんです。マイノリティとマイノリティの間で対立とか衝突があるのではないかと予想されたりしていたんですが、問題はおきなかった。そういう話とか、その他にもチカノとの関係とか、日系人の間の話とか、そういうことがあります。あるいは黒人新聞とか黒人メディアについても分析している研究者もいますので、これから協力して一緒に研究、勉強したいと考えています。実はこの夏休みの間、かなりたくさん W・E・B・デュボイスの本などを読んでいますので、今後また報告できればと思っています。全部の疑問点にふれることができなくて申し訳ないのですが、時間が来たので、このあたりで終わらせてもらいます。

### 13 水谷：

フジタニさん、どうもありがとうございました。それでは、ここから討論のほうに移りたいと思いますけれども、まず、あらかじめ、コメントをお願いしてらっしゃる方が何人かおられますので、こちらから指名させていただきたいと思います。まず、酒井直樹さん、よろしくお願いたします。

### 14 酒井直樹：

『共振する帝国——日系人米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士』を貫いている問題系のなかで一番大きいのは、やっぱり権力の問題ではないでしょうか。とくに人種主義と呼ばれてきた、近代の国際世界を前提にして普及してきた権力の在り方が、この本の中心の主題を形作って

いるのではないかと思います。そこで、これまで歴史研究は権力についてどのように対応してきたかを、少し考えてみましょう。

歴史研究と権力のかかわり方を考えるとき、大雑把に言って、二つの方向が考えられるのではないかと思います。

一つは、歴史を新たに語り直すことによって、過去の事象をめぐる事実判断、解釈、あるいは認識の枠組みを変えようと試みる方向です。過去を語ることによって、過去と現在の関係に変化をもたらして、間接的な干渉を通じて、現在の変革に寄与することを目指すわけですね。大雑把に言ってしまえば、これは多分、歴史研究の正道と言いきえるのではないかと思います。この方向は多くの歴史家が目指してきたし、この思惑の下で多くの歴史の語りが書かれてきました。

これに対して、別の方向が考えられます。それは現在の知識生産の制度・体制に直接干渉する方向と言ってよいのではないのでしょうか。歴史家が携わる学問そのものを歴史の中に置き、歴史学を歴史化し、歴史という知識そのものを問題視するやり方です。歴史をディシプリンとかたちで考えることによって、学問・訓練・自己形成、あるいは知識を作りだしていくことによって自分を創り出す制度・体制の検討に主眼を置き、過去の事象の吟味を現在の知識の生産の変革の材料として用いようとする事です。間接的にではなく、直接的に現在に干渉をしようとする在り方と言ってよいのではないかと思います。これまで、すべての歴史は現代史であると何度も言われてきましたが、これはまさに現代史として歴史を語ろうとする試みでしょう。このような現在に関わる歴史は、一般的に言って、理論的な歴史になる傾向が強いと思います。「理論」というと何か漠然として、実践から切り離された抽象的な観念の世界に耽溺することのように想像する人が多いの

ですが、「理論」はむしろ権力との直接の関わりを志向する歴史家の態度に由来すると考えると、わかりやすくなるのではないかと思います。

もちろん、この二つの歴史研究と権力の関わりは、きっぱりと分けられるものではなくて、個々の歴史研究には両方の契機が異なった配分で併存するのが普通です。ある種の研究は、前者の契機が色濃くあり、別の研究では後者の契機が圧倒する。もちろん、いずれの関心もない歴史研究があるわけですね。そこでは過去の事象の客観的真実を史料に基づいてありのままに記述することが追及されることとなりますが、先ほどフジタニさんもちよっとふれたように、この種の歴史研究は、今日は度外視してよいでしょう。

そこで、本日の議題である『共振する帝国』は明らかに後者の歴史研究の特徴を持つと、一応勝手にこちらで決めさせていただきたいと思います。尤も、勝手に決めるつもりでいたのですが、著者フジタニさんご自身が、ちょうど今、その立場を宣言してくださったわけで、私は著者の立場を踏襲するというに於いて、これから話を進ませていただきます。

後者の歴史研究の代表的な例として、ミシェル・フーコーの歴史研究に現れた顕著な傾向、権力を考えるとき、知識の生産を中心的な課題とするという、意識的な立場があると思います。私自身はフーコーの著作を網羅的に調べたわけではないので、確定的なことを言えないのですが、少なくとも初期の考古学的な探究から晩年の系譜学的な模索に至るまで、彼の歴史研究においては、知識の生産が、権力を考えるためのいわば舞台であり続けたわけです。したがって、後者の歴史研究、つまり、現在に直接かかわろうとする歴史研究の性格と内在的に結びついた考察をフーコーは決して手放そうとはしませんでした。

『共振する帝国』は、既にコメンテーターの

発表にもあるし、それからフジタニさんも述べているように、ミシェル・フーコーの歴史研究に触発されています。当然の結果として、著者は、ある理論的な問いにいやがおうにも導かれてしまっている。これはフーコーを読んできた人間にとっては、避けられない宿命なようなものかもしれませんが、ただし、それはフーコーが立てた理論的な問いを復唱しているということでは全くありません。

フジタニさんはマイノリティが国民に統合されることに注目しました。排除の力学がなければ、そもそもマイノリティ(少数者)と呼ばれることはないわけですが、排除で働く権力と、マイノリティを統合する際の統治の戦略で働く権力の両方を視座に収めたのです。在来の差別と抑圧の理解に基づく権力の理解と、知識の生産で作動する権力の理解を比較して、一つを「粗野なレイシズム」と呼び、もう一つを「上品なレイシズム」と呼んで、人種主義のあり方に対比を導入し、そこから人種主義の権力としてのあり方を解析していったわけです。人種主義の理解の仕方が異なると、統治の方策としての権力のあり方にも違いが出て来ます。「粗野な人種主義」と「上品な人種主義」は、権力の異なった働きに対応するわけで、この違いは人種主義の「進歩」の度合いに対応している、と言ってもよいかもしれませんが、進歩と言っても、戦後日本に典型的に現れ、最近の合州国にもみられるように、状況が変われば、すぐに先祖帰りをしてしまいます。「粗野な人種主義」と「上品な人種主義」の統治における権力の働きにおける違いを示して見せるために、第二次世界大戦中の日系アメリカ人の待遇と大日本帝国内の朝鮮人の待遇に焦点を合わせたと言ってもよいでしょう。

これは私の推測の範囲を出ませんが、フジタニさんの分析をひそかに動機づけていたのが、第二次世界大戦の後になって、より洗練

されたかたちで成就する植民地体制への注視だったと思います。あの戦中期の二つの帝国を語りつつ、実は理論的な関心としては、植民地が表向きには解消された後(第二次世界大戦後、連合国による日本占領が終了する1952年以降には日本は独立したことになりませんが、より巧妙な仕方で植民地体制に繰り込まれます)で、新しい形の植民地主義がどのように作動し続けてきたか、そして、そのような植民地体制にさらされた少数者が、どのように状況に対応していったか、への関心が密かに彼の研究を導いていたと私は考えたいのです。

ここで一つ確認しておかなければならないのは、前近代の植民地とは違って、いわゆる近代植民地主義といった時には、特定の但し書きが必要な点です。近代植民地主義というのは、近代国際世界の中で、つまり近代の国際的な秩序ができあがったときに可能になった支配の体制であって、それ以前の地中海沿岸やイングランドなどにあった古代ローマ帝国の植民地や中国の歴代王朝が現在の東南アジアなどに作り上げた植民地の支配と同一視するわけにはゆきません。それが第一点ですね。ですから、そのような旧来の植民地体制のいくつかは19世紀まで残存するわけですが、19世紀末から第一次世界大戦までに解体を起こすわけですね。宗主国が国民国家の主権形態を取らない植民地支配は、次々に崩壊してゆく。20世紀になると、植民地主義は概ね国民国家による統治体制のことを指すようになります。それまでであった、国民国家になれなかった清帝国やオスマン・トルコなどの植民地は次々に後退して、国民国家に脱皮できた連合王国、フランス共和国、ドイツ帝国などが世界中の植民地を独占するようになる。だから19世紀の末までには、このような植民地体制が国際法に基づく国際世界の秩序の一部として確立されてゆきます。帝国主義の時代とは、

国民国家の競争の時代でもあったわけです。

近代国家の原則とは真っ向から矛盾する幕藩体制を破棄して、領土的国家主権を遂行できる体制としての天皇制を樹立した日本も、まず国民の創出に勤しむ一方で資本主義経済に必要な国内条件を整備してゆきます。明治維新というのは、国民を作るための大きな脱皮の過程だったわけで、いったんこのような近代国民国家を作り出し、国際世界の一員となった段階で、近代化して新たに国民国家となり国際法によって統御された国際秩序に積極的に参加した日本は、当然、近代植民地主義を標榜する資格を得たと思うようになる。そして、19世紀の末から20世紀の初頭にかけて、近代的国民国家＝植民地帝国へと成長を遂げる。

しかし、1920年代、すでに第一次世界大戦が終わった段階で、アメリカ合州国も大日本帝国も、旧来の古典的な国際法によって正統化されてきた英仏の植民地主義が確実に行き詰っているということを見抜いていたと思います。そこで、太平洋を挟んだ二つの帝国が、では、どういうふうに植民地主義を刷新していくかという作業に没入し始めます。

この『共振する帝国』という本は、恐らくこのような関心に導かれて書かれていて、そこで“race”の問題が出てくるわけですね。“race”の一つには競争、つまり、そのようなよりより洗練された植民地支配の技術をいかにして作るかということ在必死に考え始めていて、日本の知識人もアメリカの知識人も競争していたわけです。合州国も日本も、国際的な帝国主義の競争状態に置かれていたわけです。同時に、この競争の中で重要な課題として浮上してきたのが“race”人種だと思います。

人種主義は、国民国家内の少数者と国外の植民地における被支配住民の両方に関わる権力の営みであり、国内のマイノリティも国外の

植民地住民も、ともに、統治の重要な適用対象です。国民国家の「国民」という共同性を仮構する上で、人種概念は掛け替えのない重要性を担っていたと思います。

18世紀に発明された人種という概念は、19世紀になると科学的人種主義の人気とともに、広く普及するようになります。まず、ここで忘れてならないのは、人種概念さらに人種概念を政治社会的実践に応用する言説としての人種主義も、もともと肯定的なものとして捉えられていた点です。例えば、20世紀初めの人口政策、家族政策、女権運動などは、人種概念をその正当化のためにしばしば援用していました。国民の福祉向上の理念は、人種の改良と優生保護に訴えることによって、推奨された事例が多々あります。と同時に、20世紀になると、人種を否定的な価値を担ったものとして語る事例も増えてきます。

そこには、植民地主義と植民地主義を生んだ近代国際世界への新たな理解があったのではないのでしょうか。例えば、日本人の知識人の多くは、様々な国際的な場面で人種差別を体験してきました。自分達が差別される側に置かれた経験と、自分達が差別する側に自己画定する経験は、彼らが抱いていた人種主義に対する両義的な態度のなかに訓み取ることが可能です。いわゆる「啓蒙知識人」の多くが日本近代化のほとんど狂信的な信奉者であったのは、彼らは、近代国際世界が人種主義の世界である事実を身をもって知っていたからでしょう。植民地化されることが、どれほど屈辱的なものであるかを、彼らはよく解っていました。と同時に、自分たち以外の人々を植民地化することが、国際法の下で近代国家の当然の権限と見なされていたことも、彼らは十分に了解していたのです。他国を植民地化することは、彼らに強い自信と自己尊厳を与えるとともに、他国によって植民地化されることは、彼らに屈

辱と卑屈な奴隷根性を生み出します。だから、近代化とは、植民地化された状態から植民地化する状態へと、昇級することでもあったわけです。さらに重要なことに、植民地化と被植民地化の力学は、国民統合とマイノリティ統治にとって核心的な事態であって、権力の中心的な課題でもありました。

つまり、1920年代に人種主義が国際的な場面で、ある否定的な意味を持った用語として捉えられ始めるわけですね。それまでは人種主義というのは、基本的には国際的な世界の秩序のことだったことだと思います。ですから、明治のはじめには、始まったばかりの普遍的国民教育で、子供達に世界の人種秩序を教えたわけです。国民共同体を維持するために、国際世界が人種主義によって秩序づけられ、世界には人種の位階があることを、知らなければなりません。文明化した人種と文明化以前の人種が世界にいることを教え、日本国民は文明国の仲間に入らなければならないと、近代化の世界観を幼い国民たちの頭に叩き込もうとしたわけです。

「国民」を作ろうとすると、必ず、少数者と呼ばれる人々が副産物として生み出されてくる。というのは、国民は社会的身分を廃棄した後の平等な個人によって構成された共同体であるという建前を持っているからです。一君万民制の方針によって土農工商の身分制度を廃止した日本の場合でも、ひろたまさきさんが論じたように、平等な国民になり損なう少数者に対する差別の問題が必ず起こってきってしまう。そこで、国民共同体を維持するためには、一方で国民の外部を意味する外国人を排除するとともに、国民から落ちこぼれた少数者の統合が必要になってきます。

国民、民族、人種という範疇を並列に並べて比較してみるとすぐにわかることは、これらの集団が同型 (homologous) であることです。

国民は、国家主権との関係で個人を規定するときに得られる共同体の規定です。民族は、習慣や文化との関係で個人を規定するときに得られる共同体の規定でしょう。さらに、人種は、遺伝的な形質や先祖から継承した素質(言語や信仰を含む場合も多い)との関係で個人を規定するときに得られる共同体の規定ということになります。しかし、実は、国民、民族、人種を明確に区別する規範はないので、国民と民族が同義語として使われたり、民族と人種が互換的に用いられる例は掃いて捨てるほどあります。中国語や韓国語では、民族は国民の意味で使われますし、もともとインド・ヨーロッパ語を話す民族という意味のアーリア人は、ドイツの国民社会主義者らによってユダヤ人やアラブ人を含むセム族から差別するために、ヨーロッパ人を総括する人種の範疇として用いられたことはよく知られています。つまり、国民、民族、人種は、融通無碍に、横滑りする範疇であり、日本で見られる韓国・朝鮮人差別を、「民族差別」と呼んでお茶を濁そうとする向きもあるようですが、これは典型的な人種差別にすぎません。

ところが、近代世界が人種の秩序によって構造化されている事実と、人種の位階を昇級することとして理解された近代化を、敵意の眼差しで見つめる人々が、世界には膨大な数でいることがだんだん意識されてくる。人種主義と人種の位階は、もともと、国際法によって統御された近代世界と共に発展してきました。白人と非白人の二項対立あるいは無色人種 (the non-colored) と有色人種 (the colored) の区別は、もともと、国際法によって保護された領土 (ヨーロッパ、後に西洋と呼ばれるようになる) とそこに居住する人々に対して国際法によって保護されない領土 (非ヨーロッパ、後に非西洋となる) の間の対比に由来します。国際法によって保護されていない以上、非ヨーロッパは

植民地化の暴力から自らを保護する術を持たなかった。最初に「アメリカの征服」が起こり、産業革命を経てヨーロッパが軍事的技術で優越するようになると、ヨーロッパの列強は、次々にアジア、アフリカ、オセアニアを植民地化し、スチュアート・ホールが「西洋と残余の言説」(the discourse of the-West-and-the-Rest)と呼んだ近代世界特有の語りであらわになってきます。

近代の植民地主義と人種主義は、その出自において、重なっていると考えざるをえません。したがって、植民地支配が広がるにつれて、人種主義にさらされる人々の数も、幾何級数的に増えてくる。国際的にも人種主義は、東アジア、東南アジア、それから南アジア、そしてアフリカなどで、近代的な教育を受けた知識人の間で、否定的・批判的に捉えられ始めます。1924年にジョンソン・リード法(Johnson-Reed Act)が合州国議会を通過し、西・北ヨーロッパからの移民を優遇するとともに東・南ヨーロッパからの移民を制限するだけでなく、日本を含めるアジアからの移民は排除されることとなりますが、この立法処置はアジアの知識人に、世界が人種主義の秩序によって統御されている事実を見て見ないふりをして済ますことができないことを教えてくれます。と同時に、帝国主義的国民国家がアジアに進出して、各地の地元の住民の支持を受けるためには、人種主義を非難する錦の御旗を上げなければならないことも、教えてくれることになるのです。

大英帝国やフランス共和国などのヨーロッパ列強の統治した植民地では、統治権力の階層化の一環として人種主義は恒常化していました。そこで如実に実践されたのが「粗野な人種主義」です。宗主国民と植民地原住民の階層化が人種による差異として正統化されていました。科学的人種主義によれば、人種は個人の生理的・身体的特徴による分類の体系と考え

られますが、実は政治的に制度化された階層秩序を生物学的に本質化する言説にすぎません。ですから、例えば、連合王国の国民である個人は、宗主国民であるという一点で、「白人」として支配階級に編入され、植民地住民は「有色人」として被支配階級に編入されました。つまり、国際世界の統治秩序で主権国家の臣民である者(=西洋人)は、個人の水準では、白人と見なされ、植民地の原住民(=非西洋人)は有色人と登録されることになるのです。

ところが、このような人種主義の実践を弾劾する反植民地主義の国民独立運動が、東アジアでも勃興しつつあったのです。そこに、新たに植民地支配を作り出そうとする新興植民地勢力であったアメリカ合州国や日本は、旧来の人種主義をそのまま持ち込むことはできませんでした。新たにヘゲモニーを取るためには、人種主義を表面に押し立てるわけにはゆかない。これまでの人種主義を放置したままでは、新参者の帝国的国民主義がヘゲモニーを達成するわけにはゆかない。新たなヘゲモニー争奪の競争が、西太平洋で展開されることになります。

これは太平洋における帝国の競争と、それから大西洋における帝国の競争の間の大きな違いですね。人種主義に対する否定が太平洋の側で早く起こったのに対して、大西洋の側では、人種主義をめぐる視点の組み換えの作業は、実はやっぱり第二次世界大戦後、特にドイツにおけるユダヤ人や少数者に対する人種差別の問題が大々的に取り上げられてからであって、ずっと遅れてきます。「粗野な人種主義」から「上品な人種主義」への進化には、このような国際環境の違いが反映していました。まさに、人種(race)と競争(race)は、このような形で結びつけられていたのです。

ところが、その後で大日本帝国が敗北しまし

たから、そのためにこのような植民地体制に対する競争の状況がなくなってしまう。対抗する二つの宗主国ではなくて、日本も実質的な植民地の一つになってしまうから、合州国に対抗する競争相手がなくなってしまう。「上品な人種主義」は、もっぱら、合州国に特有の人種の管理政策であるかのように展開することになり現在に至っています。

日本では、戦後はそういった意味でも、多民族統合の問題意識が消滅してしまい、固定した国民＝民族意識だけになってしまう。それとは対照的に、合州国では、国内の少数者の統合の問題だけでなく、新たに支配の下に繰り込んだ東アジア、中南米、東南アジア、アフリカ、南アジア、東欧などの地域に関する知識の生産を担う「地域研究」(area studies)という研究体制ができあがってくるわけです。1950年代以降、地域研究は、大学における人文・社会科学のあり方を大きく変えてゆきます。合州国における日本研究は、戦前には学問分野としてはほとんど存在しませんでした。戦中諜報活動として始まり、戦後、地域研究の一つとして飛躍的な発展を遂げます。地域研究というのは国民意識研究のネガティブ、陰画のようなものであって、そこで興味深いのは、アメリカの国民と日本の国民の間では、同じことを目指して競争をしていたという事例を地域研究では言及してはならないことになるのです。フジタニさんの仕事の画期的な点は、これまで合州国の日本研究でも合州国の日本研究でも否認されてきた、二つの帝國的国民主義の間の共通性を正面から取り上げたことでしょう。

もともとアメリカは、日本とは全然違う国だった、ということになる。そして特に50年代から60年代になってくると、そこで今度は、関心の中心が近代化になってきますから、近代化論でアメリカの社会は普遍主義的社会であ

り、日本は特殊主義的社会であるという、その典型的な議論が繰り出されてくるわけですが、そのような枠組みの中で戦後の日本の知識も生成され、それから同時にアメリカにおける知識も生成されてきます。そのような仕方でも知識を作り上げることが、まさに権力が作動するということですから、そのような知識に対して冒頭で述べたように、現代の権力に直接対峙しようとする歴史研究の立場から、『共振する帝国——日系人外米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士』という本が書かれたのではないかと、私は推測したわけです。

今日はありがたいことに、この思い込みが著者自身の見解とそれほど違わないのだということがわかってほっとしたところです。

#### 15 水谷：

酒井さん、どうもありがとうございました。では引き続きまして駒込さん、よろしければ一言お願いできないでしょうか。

#### 16 駒込武：

私からは、フジタニさんのご研究と、台湾史に関する自分自身とのかかわりを考える中で気になった論点を指摘したいと思います。①「志願する」ということ、②「徴兵される」ということ、③朝鮮人日本兵の「戦後」という順にお話します。

#### ①「志願する」ということ

フジタニさんのご研究では、なぜ朝鮮人が日本軍兵士に志願したのか、日系人が米軍兵士に志願したのかという問題が、個人的な動機というよりも、志願へと誘った権力の様式に即して分析されています。私も台湾史に関する自分の研究『世界史のなかの台湾植民地支配』(2015年)の中でそうした問題を取り上げて、全体主義な体制の下で差別からの解放を求め

ざるを得ない状況がある中で「能動的」で「主体的」な「自己決定」が調達されると指摘しました。この点はフジタニさんのご研究と重なるはずだと自分では考えています。

私の研究では神社参拝という踏み絵がこれを踏まない「自由」を含む「主体化」の形式だったことを強調しました。その際、フジタニさんの『共振する帝国』第3章で分析されている、日系アメリカ人の忠誠心を問う質問票との相似性を指摘しました。忠誠を問う質問票に「イエス」と答えて米軍兵士となるか、「ノー」と答えて追放・収監されるのか。二者択一的で曖昧さを許さない形で国家への忠誠心を問うていること、「自由な選択」を許しているようでもそもそも選択肢を極度に狭める権力の磁場が構成されている点において、「文化的」「宗教的」な意匠の差異にかかわらず、帝国日本が植民地住民に神社参拝を求めた権力の様式と共通していると考えました。

フジタニさんのご著書は、帝国日本における神社参拝を特殊日本的な「文化」「宗教」の問題として考えるのではなく、植民地主義的な権力の様式として考えるための必要性を示しています。日本特殊論を前提とする植民地主義批判はともすれば相対的に「人道的」とされるアメリカの植民主義を正当化する材料とされてしまいます。それはアメリカ帝国の庇護下で「戦後」も継続する日本植民地主義の延命に資するものともなります……。そうした二重三重のトラップがある中で、朝鮮人の軍事動員と日系アメリカ人の軍事動員の相対性にあえて光をあてたフジタニさんのご研究は真に画期的なものであり、私はその研究のスタンスに深く共鳴しています。

ただし、フジタニさんのご研究と私の研究のあいだには見解の相違、というよりは微妙な力点の相違もあります。

必ずしも明言はされていませんが、フジタニ

さんのご研究は、私の旧著『植民地帝国日本の文化統合』（1996年）への批判としての意味も持つところがあると理解しています。旧著で私は戦争末期においてさえ朝鮮人や台湾人の本籍移転の禁止という原則が維持されたことに着目しながら、「血の観念に基づく種的同一性への固着」は依然として維持されており、「同化」とか「内鮮一体」という標語は現実には形骸化を運命づけられた「建前」だったと書いています。これに対して、フジタニさんは、血の象徴性を否定するプロパガンダが発せられた「意図」というよりも、それが実際に果たした「効果」——それはときに「意図せざる効果」でもある——に着目すべきことを説いています。フジタニさんご指摘の通り、たとえ言説と実際の制度が乖離していたとしても、あるいはそこに矛盾が存在したとしても、レイシズムの実践が「効果」をもちうることはあります。「戦争遂行に向けて朝鮮人青年男性とその家族を動員するためのプロパガンダ」たる映画や文学が、帝国のプロジェクトに参加する欲望を喚起するようなケースです。そのことを私は過少評価していました。自分自身の新著（2015年）で取り組む過程で、旧著では具体的に踏み込めなかった戦時動員の問題にわずかながらでも言及するに及んでそのことを痛感しました。ですので、私の旧著に対するフジタニさんご批判はあたっているところがあります。

以上のことを確認した上でということになりますが、新著で指摘したように、フジタニさんのご研究ではプロパガンダの「効果」を過大に評価しているところはないだろうかという疑問を感じることもあります。

『共振する帝国』第6章の最後には、徴兵された経験のある朝鮮人がインタビューに応じて「差別はなかった」と語りながら映画『望楼の決死隊』へのノスタルジアを表明しています。これを糸口として、第7章以降で『望楼の決死

隊』を含めて映画や文学の分析がなされます。その分析自体は興味深く説得力があるものの、朝鮮人全体から見れば、これらの映画や文学に接した人々は相当に「例外的」であったとみるべきではないでしょうか。フジタニさんは、プロパガンダは朝鮮人ばかりか（プロパガンダの主体であるはずの）日本人にも向けられたと書いていますが、映画作品や文学作品が日本語をベースとしたことを考えるならば、むしろ日本人こそが主な受容者であり、一部の朝鮮人もこれを享受したとみるべきではないでしょうか。

『共振する帝国』第1章では、「強制労働に動員された貧しい男性たちや、性奴隷になることを強要された貧しい女性たち」は「生-権力のポジティブさにとっての例外」であったと記しています。ですが、数量的な規模という即物的な観点からするならば、九州や北海道の炭鉱に徴用されて強制労働に従事させられる状況こそ朝鮮人にとって一般的な事態であり、志願兵はむしろ「例外的」だったのではないかと思います。さらに日本軍の兵営において「差別はなかった」という回想がリアルな根拠のあるものだとして、それは基本的に社会それ自身が「監禁の空間」であった植民地朝鮮において、兵営という空間がむしろ「例外的」に「平等」に近かったことを物語るものと思います。

この場合の「例外的」は、さしあたり人口規模という側面から考えています。本書第6章では志願兵が男性に限定されるのはもとより、学歴という点では中等学校卒業以上の者は少ない一方、小学校6年卒業程度の者が8割以上を占めることが明らかにされています。日本内地では早々に義務教育制度を設けて20世紀初めには就学率ほぼ100%を達成したのに対して、朝鮮では義務教育制度を施行しなかったために、1945年当時でも就学率は50%に達しませんでした。いま手元に確かな数字はあ

りませんが、就学者の卒業率まで考慮すれば、小学校（1938年の第3次朝鮮教育令制定以前は普通学校）卒業程度でも「エリート予備軍」あるいは「準エリート」という「例外的」性格を備えていたと考えられます。「例外的」だということは、重要ではないということではありません。実際に「エリート」たりえない人が大多数であったとしても、そうなりたいという欲望が広く浸透することによって、社会統制は効果的に機能するからです。

それにしても、『共振する帝国』における「例外性」の位置づけは、「地」と「図」が反転している印象を与えます。おそらく日系アメリカ人との相対性を強調するという本書全体のねらいが、そこに影響しているのではないかと思います。そうした印象を防ぐためには、プロパガンダのかたわらでテロル（国家暴力）も行使されたと語るばかりではなく、映画や文学を通じたプロパガンダが「効果的に」機能したのは、主に「準エリート」の男性であったという文脈の限定性をより明確化する必要があったのではないかと思います。

## ②「徴兵される」ということ

志願兵制度は、志願する側での能動性を必要とするため、志願させようとする側でも手練手管を尽くさざるをえないところがあります。そこに新しい生-権力の様式が見られることとなります。これに対して、赤紙による「徴兵」は直接的な権力関係を象徴しています。「志願」する者が能動性（エイジェンシー）の発揮を求められるのに対して、「徴兵」はその局面に限定すればあくまでも受動的な出来事です。この「志願」と「徴兵」の質的な違いをどのように考えるべきでしょうか。そうした問いは、朝鮮人が日本軍兵士になることと、日本内地に本籍を持つ日本人が日本軍兵士となることとの関係をどのように考えるかという問題にも連なります。

今年度、私は京都大学のゼミで、藤井忠俊『国防婦人会』（1985年）、同『兵たちの戦争』（2000年）、鹿野政直『兵士であること』（2005年）など戦中期に青年時代を送った「民衆史家」の本を読みました。そこでは、全体として、日本軍兵士となった日本人男性もまた被害者である、いわば「加害者とさせられた被害者」であるということが強調されていました。ゼミの学生の、私自身も、こうした指摘に戸惑いました。それはそうだとすると、その点を強調することは、植民地・占領地における日本軍兵士の加害者性——とりわけ日本軍「慰安婦」とされた女性への性暴力——を曖昧にするものとも感じられたからです。

他方で、徴兵制という文字通りの強制的システムの暴力性を自分自身が過少評価してこなかったかという自省も生じました。召集令状が来たならば、どんな仕事をしていて、どんな家族状況であるかにもかかわりなく、一定の期限内に入営しなくてはならない、もしもこれを拒否すれば投獄される。ただし、その代わり、徴兵されて戦死した者は靖国神社に「祀られる」だけでなく、それなりに手厚い保険金や扶助料が遺族に対して支給される……。そこに見られる国家権力の働き方とその「効果」をどのように理解すればよいのでしょうか。

鹿野政直氏の研究では、故郷の田畑を心配する日本人兵士の手紙に着目して「兵士たちはそれほど後髪引かれつつ動員されていたのであり、その強さに抗しうる強さで聖戦意識に帰依することにより、気がかりを断ち切ろうともがいたのでもあった」と論じています（『兵士であること』、166頁）。徴兵されることそれ自体は受動的な経験であったとしても、生活者としての気がかりを断ち切って心身ともに「日本軍兵士」となりきることは能動的なことであり、たとえ兵営の中に投げ込まれた後であっても能動性への跳躍の契機が必要とされたことがわ

かります。

それでは、跳躍の契機はどのようなものであったのか。「東洋永遠の平和」という大義について、鹿野氏は「振りかざさずにはいられなかった大義は、手駒になることをみずから言いきかせるさいに発せられる悲鳴と聞こえなくもない。そのような固い観念にわが身をぶつけることによって生活者から兵士への転換と矯正をみずから強いたのである」と記しています（同前、154頁）。もう一つの跳躍の契機は郷土への意識とのかかわりであったとされます。「彼らを捉えて離さなかったのは、郷土に向っての責務感恥辱感をともなうての面目意識であった。そのことが、ぶざまさへの、過度にというべき鋭敏な心を培った」とされています（同前、170頁）。その上で、戦場で殺し殺される経験そのものが、自分たちこそ常に歴史を動かす主体であり、またあるべきだという「主人公意識」を強めていくと鹿野氏は論じています。

鹿野氏の研究をふまえながら、台湾人や朝鮮人にとって日本兵として徴兵されるのはどのような経験であったのか、あらためて考える必要があると感じました。一つの仮説として考えられることは、「東洋永遠の平和」というような大義も、郷土への「責務感恥辱感」も跳躍の契機とはなりえなかったのではないかということです。

私がインタビューしたことのある台湾人は、陸軍幹部候補生に志願した理由を聞かれた際、翌年（1944年）から徴兵制が導入されることを知っていたので「兵隊に取られるならあっさり幹部になった方がいいと思ったんですよ。一か八か行かなければ、南洋で野垂れ死にするでしょう」と語っていました。この回想では、志願して「幹部候補生」になることと、徴兵されて「兵隊」として「南洋で野垂れ死」という究極の選択の中で、前者の方がましとい

う判断がなされたこととなります。そこに冷徹な「打算」をみることができるとはできません。

『共振する帝国』第6章では、朝鮮総督府の報告書の記述を「教養エリートたちは徴兵制準備に熱狂的に参加した」とまとめながら、それは「単なる誇張」ではなかっただろうと評価しています。他方で、志願拒否者や、銓衡検査時に姿を現さなかった朝鮮人に対して朝鮮総督府が「遅れてでも軍に入るか、あるいは徴用工になることを強要した」ことや、朝鮮人学徒の志願忌避者の逮捕、平壤第30師団での反乱、脱走兵の多発などの事象をとりあげています。

藤井忠俊氏や鹿野政直氏の研究を見る限り、日本人の脱走兵はほとんど登場しません。むしろ藤井氏は、脱走はもとより、捕虜になることすら選ばず、多くの兵士が「自決」「玉砕」を選んだ理由を考察の焦点に据えています。そして、「玉砕」を生み出した理由について「むぎむぎ敵の砲撃・射撃の餌食になるまま何度も突撃を命じられたついに自決さえも命令されるというそのとき、自分にたちかえる力、そこで自分を守る判断にたどりつくことができない」と書いています(『兵たちの戦争』41頁)。「自決が命令される」というアイロニーは、まさにフジタニさんのご研究での「自決」という言葉の分析を思い起こさせます。このアイロニカルな事態への屈従——生死の竿頭においても「自分にたちかえる力」を持ちえない事態——は、朝鮮人兵士よりも日本人兵士においてこそ一般的だったのではないかと思います。

あくまでも程度の違いではあるのですが、「忌避」「反乱」「脱走」という選択肢は日本人兵士において相対的に少なく、朝鮮人兵士において相対的に高かったと考えられます。藤井氏は、朝鮮人や中国人の場合には底にある意識においてファシズムの評価を見誤ることはほとんどなかったが、日本人民衆の場合は「ファ

シズムの被害者」だけでも同時に「すべてファシストの下士官候補でもあった」と書いています(藤井忠俊「民衆動員について考えたこと」『季刊 現代史』第2号、1973年5月)(藤井忠俊研究会『藤井忠俊著作集1』、不二出版、2021年所収)。フジタニさんは、このような指摘についてどのようにお考えでしょうか。私自身は、藤井氏と同様に、意識の表層でプロパガンダを受容していたとしても、深層では多くの朝鮮人や台湾人が「冷めた意識」を保ち続けたと考えていますが、朝鮮人兵士と日本人兵士のあいだにそれほどの違いはなかったという解釈もありうると思います。フジタニさんは、どのようにお考えでしょうか？

上記の点に関連して、第8章「ジェンダー・セクシュアリティ・家族の政治」で朝鮮人兵士のイメージが「軍事化されると同時に文明化された男性性の欲望」を喚起し、その主体を動員したという指摘はたいへん重要と感じています。日本社会と異なる形ではあれ朝鮮社会にも男性性への欲望があらかじめ組み込まれていたために、たとえ「東洋永遠の平和」というスローガンになんらかの意義を見出せない場合であっても、また『望楼の決死隊』のような映画作品を解する日本語能力がない場合であっても、男性性への吸引力は強く働いたのだらうと思います。

しかし、この場合の「男性性」とは何か。藤野裕子氏が『都市と暴動の民衆史 東京・1905-1923年』(2015年)や『民衆暴力』(2020年)という本で、日比谷焼き打ち事件と、関東大震災における朝鮮人虐殺をつなげて考える中で民衆の暴力が権力に刃向かうだけじゃなくて、レイシズムに向かうことに注意を促し、「男らしさ」への脅迫観念を暴力的な主体になる上でのポイントとして取り上げています。その上で、やくざや日雇い労働者が求める「男らしさ」と、インテリが求める「男らしさ」

の質の違いにも気をつけなくてはならないことを明らかにしています。この「男らしさ」の分節化という問題、私自身は自らの研究でとりあげることができていないのですが、今後、重要な課題となると思います。この点についてフジタ二さんに今後の研究の見通しなどあれば、教えていただきたいと思っています。

### ③朝鮮人日本兵の「戦後」

志願兵制度を通じて兵士となったものであれ、徴兵制度を通じて兵士となったものであれ、朝鮮人日本兵は、「戦後」においてその経験をどのように語ってきたのでしょうか。また、どのような場所で語る事ができたのでしょうか。

台湾の場合は、戦後国民党統治下において日本軍兵士としての経験は「(中華)民族の裏切り者」としての経験を示すものと位置付けられ、公式な場でそうした経験を語ることは忌避されてきました。それでも、1970年代以降、日本軍兵士としての経験への補償を求める運動も起こり、裁判でも争われてきました。韓国の人にとってもあんまり例は多くないけれども、日本軍兵士としての補償を求める運動が戦後あったと聞いています。この問題をどう考えるべきでしょうか？

元日本軍兵士としての補償を求めることは、少なくとも台湾の文脈では「私たち台湾人も靖国に祀ってほしい」というような声とも混じり合うために、日本の国民主義に絡め取られてしまうことであるとか、あるいは日本の洗脳から抜けきれてないみたいなネガティブな評価がなされがちでした。でも、それは簡単な問題ではないと思います。帝国の軍事動員は国民国家への回帰を志向する日本人にあっさり忘れ去られたばかりでなく、台湾でも、韓国でも、自分たちの経験について語る事ができる場がほとんどなかったのだらうと思います。語れな

かったけど、あるいは語れなかったからこそ、日本人兵士としての経験は、戦後、簡単には切り捨てられないものだったのではないかとも思います。『共振する帝国』のエピローグで言及されているように、このような東アジアの状況とアメリカで日系人が米軍兵士として自分たちはこれだけ活躍したのだから補償しろというのは状況が異なります。その状況の違いをどう考えればよいのだらう、と考えています。

かつて加藤典洋『敗戦後論』(1995年)は、自国の兵士の死を無視してアジア 2000万の死者を先に立てるのは偽善的だ、アジアの死者を悼むためにも自国兵士の死を悼む「国民的主体」を立ち上げるべきだと論じました。これに対して、高橋哲哉氏らがまずアジアの死者(被害者)に対する加害性に向かい合うべきだという批判を展開していました。高橋氏の批判はもっともなものだと思います。ただし、そもそも「自国(大日本帝国)の兵士」と「アジアの死者」という二分法は可能なのか。台湾人・朝鮮人日本軍兵士はこの二分法に収まりきらない存在なのではないか。それでは、台湾人や朝鮮人の日本軍兵士の「追悼」や「補償」はどのような形でありうるのでしょうか。国家的な慰霊のシステムに回収されてしまわない「追悼」の形式がありえるのでしょうか。

フジタ二さんのご著書の守備範囲を越えることとは思いながらも、ご著書に触発されて考えた問題として投げかけさせていただきたいと思っています。

### 17 水谷：

駒込さんありがとうございました。それではもうひとかた、尹京順さん、お願いできますでしょうか。

### 18 尹京順：

今、ご紹介していただいた尹京順と申します。

まず韓国での本書の受容状況を報告しますと、2019年に本書の翻訳が出され、書評が重要なメディアに六編ほど掲載されました<sup>(注1)</sup>。また論文が一つ刊行されています<sup>(注2)</sup>。さらにフジタニさんが2019年延世大学で開かれた韓国学フォーラムに参加されて講演をされ、その記録が『東方学誌』第188集に掲載されています。六つの書評に関しては大体が内容の紹介にとどまっています。詳細に内容を検討したものではありませんが、それでも一番多く提出されていた疑問は、日系アメリカ人と植民地の朝鮮人を同じレベルで比較できるのかということでした。また、論文に関しては、総力戦体制での統治を支配と被支配という二分法的ではなく重層的な観点から認識しようとするフジタニさんの問題意識に同意しながらも、帝国という国家権力による人種主義にどのような批判が可能なのかという疑問を提起するものでした。

以上が現在の韓国での反応ですが、私はもっと本書の中身に立ちいってみたいと思います。まずこの本で最も重要な概念である粗野な人種主義と上品な人種主義という言葉についてです。私は「上品な人種主義」にかなり違和感を感じました。人種主義に粗野なものと上品なものがあると言えるのかということです。この用語はフランツ・ファノンから借りたようですが、ファノンは上品な人種主義を“被支配者が平等になれる機会を与えられることであると認めながら結局は人種主義の再生産する差別の一つの形態だ”と定義しています。もちろん、本書では植民地支配において朝鮮人に対する差別や暴力のような粗野な人種主義がなかったとは言っていない。けれども総力戦体

制下で、粗野な人種主義が上品な人種主義へと形態を変えて国民としての権利に配慮することになり、朝鮮人が日本人と平等だと宣言されることによって両者の共存が可能になっただけでなく、ある種の朝鮮人(エリートやブルジョワなど)には予期せぬ機会(地位の向上)が与えられたと論じています。つまり、本書では人種政策の包摂的な側面が強調され、人種政策は文化主義的な理解として同化の可能性を高める戦略として作用したとされ、大日本帝国の朝鮮人に対する人種政策の肯定的な面に着目しているように感じられるのです。

ところがファノンが使った「上品な人種主義」の意味を考える必要があると思います。ご存知のようにファノンには『黒い皮膚、白い仮面』という有名な著書があります。ファノンはこの書物で“植民地黒人性”に対する分析をしています。この本の目的は、白人の文明——その文明というのは特にヨーロッパとしてのフランスを指しています——が、文化的な優秀性と経済的な優越性として被植民者に強制的に植え付けられ、自然に内面化されて、被植民者に歪曲された形で現れていることを証明することでした。実際、ファノンは、内面化された黒人(ネグリチュード)というアイデンティティには、植民地性が刻印されていることを詳細に分析します。このように被植民者の主体が確立されることを強調することで、人種主義の実態を見せようとした。ただし、そこでファノンが主体として注目しているのは、フジタニさんの本で引用されている上品な人種主義の対象になった李光洙などの民族的ブルジョワなどのエリートではなく、上品な人種主義から排除された農民、労働者などで、上品な人種主義の対象に

(注1) 서울신문, 「책꽃이」, 2019.3.14, 경향신문, 「새책 소개」, 2019.3.15, 문화일보, 「서평」, 2019.3.15, 연합뉴스, 「신간」, 2019.3.15, 세계일보, 「새로 나온 책」, 2019.3.16, NEWSIS, 「역사책」, 2019.3.17, 한겨레 21, 「신간안내」, 2019.3.28.

(注2) 김은정, 「인종과 젠더 : 범아시아적, 범태평양적 비평을 향하여」, (다카시 후지타니 / 이경훈 옮김, 『총력전 제국의 인종주의 : 제2차 세계대전기 식민지 조선인과 일본계 미국인』, 푸른역사), 『한국여성학 35(2)』, 2019.6. 한국여성학회 발행.

ならなかった人々のその力動性と生命力を高く評価するためでした。したがって本書での上品な人種主義の用いられ方と意味はファノンとはかなりズレているようです。そこで私が知りたいのは、ファノンにおいては主眼にされていた上品な人種主義から排除された人々——本書ではエリートではない大勢の朝鮮人農民や労働者ですが——に対する大日本帝国の人種政策はどのような説明が出来るのでしょうか。これが第一の質問です。

二つ目の質問は、本書で生-権力と統治性概念を持ち出している方式についてです。とはいえフーコーの生-権力や統治性の概念が本書でどのように用いられているのかを検証したいわけではなく、そもそもそうした議論は私の力量を越えています。ここでは考えてみたいのは、フーコーの生-政治が権力に対する新しい様式であり、その権力は他者がよく生きられるように生産的で肯定的な論理として作動しているとして総力戦体制の人種主義政策に有用であると捉えている考え方についてです。確かに近代以前の統治者は他者を殺す権利を通じて権力を維持しました。しかしフーコーが言っているように、現在の統治者は、肉体の管理と生に対する打算的な経営の中に編入させる方式で、人口を対象として肉体の規律化と住民の統制及び人口の調節など生体全般に介入する権力を振る舞うことになりました。これを概念化したのがいわゆる「生-権力」(bio-pouvoir)ですね。私が理解している限り、この概念は社会システムと統制政治が規律を持って肉体に対して深く介入する方式を批判的に分析するために持ち出したものです。特に「性」「性的欲望」は私的な領域に属するものではなく、近代国家においてとても重要な統治手段として作用してきました。総力戦体制時には人種主義のもとで重層的な政治構造の中で性に対する抑圧はもっと厳しくなったはずで

す。‘日本軍’「慰安婦」として動員された朝鮮の女性たちこそ生-統治の最たる産物ではないでしょうか。本書では「性奴隷になることを強要された貧しい女性たちのような人々は生-権力のポジティブさにとっての例外であり、人口総体の犠牲となった」と言っておられますが、本当に例外に過ぎないのでしょうか。むしろ「本質」として論じるべきではないのでしょうか。

最後に、本書は誰に向かって書かれたものなのか、ということです。日本帝国とアメリカ帝国の人種主義の政策を比較する際に、相違よりはむしろ共通点を強調しているような意図を強く感じました。それはアメリカに対する批判にはなるかもしれませんが、日本の植民地支配における人種主義を十分に説明し、批判することにはならないのではないかと思います。どうでしょうか。

#### 19 水谷：

尹京順さんありがとうございました。それではフジタニさんから、レスポンスがありましたらお願いいたします。時間がないので、すべてに丁寧に答えるっていうことは難しいかもわかりませんが。

#### 20 フジタニ：

ありがとうございます。酒井さん、駒込さん、尹さんの3人のレスポンスですが、酒井さんの見方は私の見方と共通していると思うので、駒込さんと尹さんのご指摘にお答えしたいと思います。まず一つは共通の違和感があると思います。それはこの本の中で、暴力についての語りがないのではないかと。つまり、上品なレイシズムを強調しすぎてるのではないかと。だからアメリカの場合には有効な歴史かもしれないものの、日本に対してはあまり有効ではないのではないのかという、そういうご指摘だと思います。

まず一つ目は駒込さんがおっしゃった志願する動機、なぜ志願したのかについてです。私が資料に基づいて思ったのは、その動機的全貌を把握することはほとんど不可能だということです。そういう調査もありますが、なぜ一人の男が、なぜその動機をこのように書いたのか、それまでわかるわけではないと思うのですね。それはスピバックが言ったような「サバルタンは語るができるか」という問題だと思います。ただしその資料を見た限り、さまざまな理由で志願することがあったと言えます。そして志願の理由のほとんどは、本当に日本人になりたいとか何かそういう動機ではなかったと思います。駒込さんが暴力の予感と言ってますけど、駒込さんのおっしゃるように、志願に見えるものの、実は志願しなければ暴力がくるという、何かそういうふうな強烈で現実的な状況もあったと思います。後は、これはいろんなインタビューにあったことですが、何となく志願した、志願してしまってえらいことになったという、そういう人たちもいました。考えてみれば、われわれも後から考えると何でそんなことをしたのかとか、振り返って考えると自分を疑問視することもあると思います。そういう動機で大変なことになったような場合もあります。後は、例えば、志願することによっていろんな技術とかを学ぶことができる。技術も軍隊の中で学んだら、つまり教育を受けることになったらまたいい職がもらえとか何かそういうふうなことがあったと思います。

私は、この暴力問題を無視しようとしたわけではなくて、むしろその暴力が常に存在している、存続しているということを言いたかったんです。公的なディスコースに上品なレイシズムが出現することで、暴力が助長される場合もあると思うのです。つまり、われわれは暴力を行使しないことで、皆に、特にエリートにいろんなチャンスを与えることで、自分たちの暴力を

カモフラージュしていく、隠蔽していくという、そういうふうな上品なレイシズムと暴力的なレイシズムの関係があったと言いたかったわけなんです。例えば、「慰安婦」になった人たちとか、あるいは強制連行された人たちとか、それは狭義の意味での例外ではないと思います。そういうことを言っているつもりはありません。しかし、その段階では上品な、いわゆる上品なレイシズムも公的なディスコースでは支配になりつつあって、政策にも影響があって、映画とか、文化とか、小説とかあらゆるところにそういう上品なレイシズムの言説があったということと言いたかったわけなんです。ですから、特に日本帝国の研究者の中では暴力の歴史はかなりたくさん研究されているわけですけど、その暴力の歴史とその暴力を否認するレイシズムにどのような関係があったのかを私は語りたかったんです。

暴力は植民地化された朝鮮人たちのエリートに対しても行使されていたわけです。例えば、徴兵制が敷かれるときに顕著にその暴力は見られます。そこでは志願も何も関係なく、強制的にエリートも一般民衆も連行されることこそが徴兵制ですから、まぎれもなく暴力はあった。ですから私がその暴力を認めていなかったというふうにこの本が読まれたとしたなら、それは私の書き方がまずかったのだろうとしか言いようがありません。今後、それをもっと注意するつもりです。本の中では何度も何度も強調した気がするのですが、もっと強調する必要があるようですね。

尹さんがおっしゃったファノンの読み方ですけど、ファノン「粗野なレイシズム」という表現を使いましたが、「上品なレイシズム」は、私が知ってる限り、彼の作品に見られないと思います。この表現は、デイヴィッド・テオ・ゴールドバーグから私が借りたものです。しかし、ファノンは「粗野なレイシズム」と違って「洗練

された形態のレイシズム」や「巧妙な形態のレイシズム」という私が使用した「上品なレイシズム」に似たような概念を持ち出しました。これらの表現は『黒い肌、白い仮面』という作品ではなく「レイシズムと文化」というファノンの小論文に見られます。この小論文は1950年代の半ば、アルジェリア戦争最中の公演の原稿です。ですから30年代、40年代とかそういう時代ではなくて、アルジェリア戦争という植民地戦争のさなかで、多分ファノンが言いたかったのは、その支配者、植民地支配者はもはやそれまでの生硬な粗野なレイシズムで植民地関係を維持できなくなっていることに気づき、いろんな巧妙な上品なやり方で支配しようとしてるが、だまされるなどという、同志にそういうふうな警告をしてたと思うのですね。その意味でも私は上品なレイシズムという言葉を使ったつもりです。

そしてもう一つはこれも延世大学でお話したときのコメントの違和感というか、反応、反発みたいな感じだったんですけども、アメリカの日系人と植民地化された朝鮮人を一緒に扱うのはおかしいと、むしろ比較不可能だというものです。そもそも日系人は自ら日本を発って、そしてアメリカへ移民して、そして人種差別などを経験したけど、尹さんが言われるとおり、日本の場合は、朝鮮、中国、台湾などを侵略したという、その侵略の歴史と移民の歴史を一緒にするのはおかしいというふうな反応だったと思います。私のそれに対するレスポンスは、私が中心に考えてたのは1930年代の後半から総力戦体制になる時期に限って、その時点でどのようにアメリカ帝国、日本帝国、がどのように変動していったかっていうことに注目していたということです。そもそもこの本では植民地主義の起源といった問題が中心的な課題ではなく、戦時期のその時点で何が変わったか、どういうふうに変ったか、何が比

較可能なのかと現在に残されたそれらの意義をいうことを指摘したかったわけなんです。

## 21 水谷：

フジタニさん、ありがとうございました。それでは、もう時間は過ぎてしまってるんですけども、12時まで延長したいと思いますので、皆さん、ご自由に発言していただければと思います。チャットのほうもご利用いただければと思います。

板垣さんからチャットにコメントいただけてます。よろしければ、発言していただければと思います。

## 22 板垣：

翻訳しながら思ったことについて少し述べてみます。

まず思ったことは、vulgar racism と polite racism を、仮に vulgar colonialism、polite colonialism とでも言うべきものをつなげて考えてみたときにどうなるのだろうか、ということでした。例えば、朝鮮の植民地統治政策において、3.1運動をきっかけに武断政治から文化政治へ、といった当時のレトリックがありましたが、この大正デモクラシー下の言説の欺瞞性については、長年の研究蓄積があります。こうしたことをはじめとして議論すべきことがあるのですが、今日は時間の制約もあるので控えておきます。

今日はそれよりも、戦時期の日本とアメリカの共振ないし相似化をこの本が可視化させたことによって見えてくる「戦後日本」という問題を論点化しておきたいと思います。二つほどあります。

一つは、エピローグで少し書かれているんですけど、戦後「モデル・マイノリティ」として語られる日系米国人と対比されるかたちで、戦後の在日朝鮮人が日本国の人口に包摂されな

いという状況が示唆されていると思うのですね。これは、この本の続きの状況を考えるうえで意味があるなと思った部分です。戦時期に皇民化政策に曝されていた在日朝鮮人が、戦後、外国人化することによって、皇民化という包摂的な権力行使から外されます。これはいわば「解放」の側面です。と同時に、社会福祉的なものからも外されて、いわば「放置」されました。これについて、フジタニさんは、「日本の敗戦は、朝鮮の人々が政治的および生-政治的国民へと包摂されていく軌道を遮断した」という書いています。これが、包摂されればよかったというような話でないことは、本書を読めば明らかです。在日朝鮮人が外国人化することで、いわゆる生権力の行使が退行していくということですね。戦時期には包摂的な権力のみならず vulgar な権力の行使も車の両輪のように存在していたわけですが、戦後に生権力が退行するのにもなって、その片輪の vulgar racism の側面があらためてくっきりと浮上した。このように捉えていくと、戦前と戦後を一貫した視点で見ることができるのではないかと思います。

例えば、戦後の在日朝鮮人は、社会政策からは間違いなく外されていきます。それは資料の残り方にも反映されていて、社会政策に関する資料は戦前よりも戦後の方が薄くなります。一方、治安維持政策のなかには、戦前も戦後も引き続き入れられており、戦後さらにその側面が強まります。

あるいは、いわゆる帰国事業をこの観点から見ることもできると思います。10万人の人口移動があるわけですから、これは間違いなく人口という観点から見られる現象です。帰国事業は生活保護からの在日朝鮮人の排除とワンセットで進められました。つまり、日本政府からすれば、戦後の在日朝鮮人というのは、生権力的な統治対象から可能なかぎり外し、排出さ

れるべき人口だったわけですね。ところがそのような vulgar racism は、戦後の国際人権レジーム下では露骨に表明できない。そこで、「居住移転の自由」という人権の言説を前面に押し出して進めていったわけです。そういうことが、この本の続きの問題として、あらためて見えてくるように思いました。

それから二点目は、かなりざっくりした話です。それは、レイシズムの「共振」という問題の裏側にある問題、すなわち共振という認識を遮断する機制の問題です。端的に言って、日本では、他ならぬ「人種」という概念(ことば)こそが、共振するレイシズムを否認する機制として機能してきたのではないかと、という話です。

ご存じのとおり、パリ講和会議で日本政府は国際連盟規約に人種差別の撤廃の条文を盛り込むよう主張し、米英などの反対により否決されました。これは日本の保守派が大好きな歴史です。しかし、この主張で日本政府関係者の頭から完全に抜け落ちていたのは、大日本帝国内のレイシズムでした。つまり、この問題で、日本側は、日本人を「差別される側」の当事者としてしか考えておらず、「差別する側」の当事者意識が欠落していました。「人種差別」なるものは、アメリカ合衆国みたいな「多人種国家」の問題だという認識が強く、この「人種」の語こそが、日本国内の民族差別(レイシズム)との関係を遮断してきたように思います。

これは戦後に連続していきます。戦後の日本国憲法第14条(法の下での平等)に、「人種、信条、性別、社会的身分又は門地により〔…〕差別されない」と、「人種」によって差別されないという文言が入っています。当時の世界の状況を見渡すと、憲法にこのような文言が入ること自体は、なかなか「先進的」ともいえる部分もあると思います。しかし、天皇や軍隊などの問題に比べれば、その意味を日本政府としては深く考えていなかったのだろうと思いま

す。実際、このような条文があるのに、戦後、今日にいたるまで、差別禁止法というものは一切制定されることがありません。法的な権利義務は平等だというような形式的平等論の解釈ばかりが前面化し、「差別されない」の方はほったらかしにされました。それは、人種差別という問題に対して非当事者性の認識があったからです。レイシズムの共振があっても、その共振を見せなくさせるような機制として「人種」概念があったのではないか、というのはそういう意味です。

最近になって「ヘイトスピーチ」が話題にのぼるまでは、日本ではレイシズム研究と呼べるようなものはすこぶる低調だったと私は思うのですが、それはこのような経緯によるものだと考えています。しかも、この間に増えてきているレイシズム研究は、基本的には「粗野なレイシズム」を想定した議論です。粗野なレイシストは、多くの日本人が、「あいつらは変な連中だ」と他者化して捉えられるような存在です。そういう現象を念頭に、何でそんなことが起こるのかというような議論ばかりです。そうした議論にももちろん意義がありますが、そこでは「上品なレイシズム」への批判的な視点が稀薄になりがちです。しかし、「粗野なレイシズム」は、政府やマスコミ、あるいは「良心的」な日本人でも行使している「上品なレイシズム」とあわせて捉える必要があると思うのです。このように、共振するレイシズム(粗野/上品)という観点をもつことによって、現代日本の議論への介入になるように思いました。以上です。

## 25 渡辺直紀：

2019年夏に韓国・延世大の国学研究院主催で行われた、本書の書評セッションについては<sup>(注3)</sup>、もう先ほどから話がずっと出ているので、私のほうからは繰り返しません。お話の出たとおりでと思います。第二次大戦時のアメリカにおける日系人の徴用と、日本帝国下の朝鮮人の徴用という、比較が無理なものを、なぜ並べて比較するのかという議論が中心にあったかと思えます。ただ一方で、聴衆席にいらした韓国の先生方の中には、きちんと比較の意義を理解し、書評者のコメントに対して批判的な反応をしていた方たちもいたということは、併せて伝えておきます。ただ、私の考えでは、比較不可能なものを並べて、朝鮮人にはこういうこともあったではないかと指摘をすることは、それ自体正しいんですけども、では一方で、アメリカの日系人社会で何があったかっていうことを具体的に把握したうえで、そのように批判されている方は、韓国の中ではかなり少数派で、去年の書評セッションの場にもほとんどいらっしゃいませんでした。両者を比較してどうなのかっていうことを本当は考えるべきですが、本書の後半に書かれている、大日本帝国下の朝鮮人、皇軍兵士、あるいはそのプロパガンダの議論について、話が集中したという印象です。

私が最近読んだ、本書に対する書評の中で一つ面白かったのは、ハーバード大学のカーター・エッカート氏(朝鮮史)のものです<sup>(注4)</sup>。彼も朝鮮史の研究者だからかもしれませんが、韓国での議論と同様のことをおっしゃってるん

(注3) 韓国・延世大国学研究院主催「東アジアの革命の歴史と記録の現在」(第5回延世韓国学フォーラム/2019年8月8日~9日、延世大文科大学100周年記念ホール)。うち、*Race for Empire*の書評セッションは8日午後に行われ、著者のフジタニ氏出席のもと、同大近代韓国学研究所のソン・ビョンクオン氏の発表および全体討論が行われた。ソン氏の書評文はその後、ソン・ビョンクオン「普遍に向かう暴力?—総力戦体制下の米日人種主義の三重暴力構造」『東方学志』延世大国学研究院、2019、no.188)として発表された。ちなみに*Race for Empire*の韓国語版は、タカシ・フジタニ(イ・ギョンフン訳)『総力戦帝国の人種主義—第2次世界大戦期の植民地朝鮮人と日系アメリカ人』(プルンヨクサ、2019年3月)として出版された。

(注4) Carter J. Eckert, TAKASHI FUJITANI. *Race for Empire: Koreans as Japanese and Japanese as Americans during World War II*. *The American Historical Review*, Volume 118, Issue 2, April 2013.

ですね。比較できないものを何で並べたのか——第二次世界大戦後、日本帝国は朝鮮人を捨てたが、日系人は立派にアメリカの公民になった、というようなことをおっしゃっています。それはそれで間違いではないのですが、その「立派」さのためにどのような経緯や苦痛を経てきたか、ということにも、やっぱり言及すべきだと思うのです。例えば、ロサンゼルスのリトルトーキョーの日系人博物館の向かいに、「ゴー・フォー・ブローク・ナショナル教育センター」というところがあります。昔の本願寺の建物をそのまま使っています。この建物自体、リトルトーキョーの日系人社会の歴史では象徴的なものでした。その中にも日系社会にかかわるいろんな人の話が写真つきで展示されているんですが、その中に先ほどの、李孝徳さんがおっしゃられたマイク・マサオカ (Mike Masaoka、二世の徴用を主張した日系人指導者) の話が出てきたり、あるいはユリ・コウチヤマ (Yuri Kochiyama)、大戦中に強制収容所において、戦後、黒人の公民権運動にかかわり、マルコム X などと交流があった日系人女性の話も出てきます。また、ヨンオク・キム (Young Oak Kim) という、大戦中、日系人部隊である「442 部隊」、日系人部隊と一緒に従軍した朝鮮人将校で、戦後ずいぶん経って、この博物館の近くに「ゴー・フォー・ブローク・メモリアル」という記念碑を立てることに功労があった人物の話が出てきます。そして展示の最後の方に『Twice Heroes』という写真集が展示・販売されています。

本書の表紙の写真はダニエル・イノウエ (元上院議員) です。“Twice” というのは、日系人として第二次世界大戦中にヨーロッパ戦線に行き、生還して帰国した人たちが、そのまま朝鮮戦争にも行って来たということです。さきほど言ったヨンオク・キムも、日系人ではありませんから、この本には出てきませんが、彼

もこの定義によれば「Twice Heroes」です (韓国で出ている「朝鮮戦争史」の類の本で、彼は38度線を数キロ北に押し上げた「功労者」として登場します)。——ですから、さきほどのカーター・エッカート氏の言葉でいえば、その後「立派」なアメリカの公民になる彼らは、そのために、大戦の後に次の戦争動員が待っていて、その「義務」も果たさなければならなかったということです (ちなみにいえば、朝鮮戦争は、アメリカの黒人兵が初めて、他の人種の兵たちと同じ部隊に所属した戦争でもあります)。そういうことだけを考えても、大戦後、日系人が「立派」にアメリカ公民になった、ということの意味が吟味できるのではないかと、日本帝国下で捨て石にされた朝鮮人とは経緯も歴史も異なりますが、そのことも含めて、帝国のもとで「人種」 (Race) が「競争」 (Race) させられることの意味を、本書の議論を通じて考えるべきではないかと思うのです。

そのような点で、さきほど、フジタニさんが、この夏、デュボイス (W. E. B. Du Bois) のものをよく読まれたとおっしゃっていました。あらためてどのような発見があったか、また機会をあらためてぜひお話しをお聞きしたいと思います。20世紀の黒人の人権闘争史と日系人の闘争史にはいくつかの接点があると聞きます。さきほどのユリ・コウチヤマの話もそうですし、マルコム X の師であったイライジャ・ムハンマド (ネーション・オブ・イスラムの創始者) に関するものなどを読んでも、デュボイスの話はよく出てきますが、そのイライジャ・ムハンマドの葬儀には、日本の右翼活動家・思想家らの花輪も結構送られたと聞きます。大戦中、日本の右翼は「アメリカは民主主義の国などではない。黒人を見ろ」と言っていました。私は若いときにそれを読んで、単なる、為にする反米宣伝くらいに思っていたのですが、大戦の前後に、日本の右翼と黒人の人権闘争に具

体的な交流があったことは、つい最近知って驚いているところです。また、アメリカの黒人の人権運動・闘争には日本の右派もそうですが、左派もいろいろな形で関与しています。どのような連帯、思想的なつながりがあったか、ありえたか、とても気になります。

**26 水谷：**

ありがとうございました。もうちょっと、時間はありませんけど、もうお一方ぐらい、もし何かありましたら、いかがでしょうか。

**27 渡辺：**

一つ、お聞きしていいですか。「ゴー・フォー・ブローク」って「撃ちてしまえ」ですよ。大戦中の日米のスローガンにも似たようなものがあると思うと、なんか妙な感じがするのですが、あれって何かの翻訳語ですか。

**28 フジタニ：**

そうですね、「ゴー・フォー・ブローク」は、もともとばくちからきてるんです。全財産をばくちに賭ける。ですから、命を懸けてやる、という感じになるでしょうか。

**29 渡辺：**

じゃあ、それは偶然、共振して、そういうスローガンが第二次世界大戦のときにあったということですね。

**30 フジタニ：**

そうなんです。

**31 渡辺：**

そうですね。わかりました。ありがとうございます。

**32 中村理香：**

すみません。ハワイのピジン・イングリッシュですよ。「ゴー・フォー・ブローク」(当たって砕けろ)という言い回しが。

**33 フジタニ：**

はい、そうです。

**34 中村：**

それから、時間があまりないかもしれないのですが、アメリカ研究の視点からの話が出てこなかったのも、今、渡辺先生から出たお話に関連して、二点だけコメントというか、感想を言わせてください。

一点目は相対性の問題とも関わっていて、渡辺先生のおっしゃったことの繰り返しになるかもしれませんが、日系アメリカ人の第二次世界大戦時の体験というのは、第442部隊にしる、第100部隊にしる、インターンメントにしる、「アメリカ帝国」の文脈で語られることは本当にはないかと、フジタニ先生のご本を読んで改めて思いました。アメリカ研究のパラダイムが、90年代くらいから、「アメリカ例外主義」から「アメリカ帝国主義」に変わってきている中でも、日系アメリカ人の第二次世界大戦時の体験が、その関連で論じられることはあまりないんじゃないかと。東(栄一郎)さんが、同時期の日系のセトラコロンニアリズムをやっていますし、セトラの視点から砂漠の収容所やそれに付随する市民権の意味を問い直している日系作家はいますが。ただ、フジタニ先生もおっしゃっているように、第442部隊の構成員の多くがハワイ出身だったにもかかわらず、第442部隊や従軍の議論からアメリカ帝国主義みたいなものが消えてしまっている。特に、さきほど渡辺先生がおっしゃったように、第442部隊が、その後のアメリカの帝国拡張戦争との関係の中で、マイノリティ兵士のある種シン

ボルというか、日本で言うと「ひめゆり」に近い部分もあるかもしれませんが、従軍をとおした国家への貢献のシンボルとして掲げられてきたことを考えると、その不在はどうなのかなと思います。

アメリカで、マイノリティ兵士が帝国のエージェントとなることで国民権を獲得してきたことの両義性は当然あるわけですが、そのところが、やはりエイジアン・アメリカン・スタディーズの中でも、第442部隊をアメリカ帝国の中に位置づけることは非常に難しく、そこにメスを入れたという言い方はよくないかもしれませんが、そのところを切り込んだというのは、私はものすごく重要なんじゃないかと思いました。と同時に、さきほど尹先生がおっしゃった、「これは誰を対象に書かれた本なのか」、「アメリカに対する批判ならいいかもしれないが」というところも、突き刺さりました。今、それに対して自分がどう思えるかってことはまだわからないですが、ぜひ考えさせてほしいと思います。

もう一点は、「帝国」の境界についてで、フジタニ先生の今回のご本は、いずれも帝国の中の「国民」を、ハワイの場合は準州ですけども、いわゆる「国民」あるいは「臣民」を研究対象にしていますが、例えば、最近出たエイジアン・アメリカンの本で、シミオン・マン(Simeon Man)さんの『ソルジャリング・スルー・エンパイア(Soldiering through Empire)』という、フジタニ先生も推薦文を書かれている本があります。それは、ベトナム戦争において、「アメリカ国民」となったハワイ出身のアジア系アメリカ兵士と、アメリカ帝国が動員した韓国人兵士やフィリピン人を並列的に論じていて、「国内」と「国外」のアジア人がアメリカの帝国拡大のための戦争に動員された経緯に注目することで、フジタニ先生のご本を出発点として、帝国の境界を考える提起になっ

ていて興味深いと思いました。すみません、最後ちょっと要領をえないですけど、以上です。

### 35 水谷：

さて、時間が来たようなんですけれども、最後にフジタニ先生、もし何かありましたら、一言お願いして、これで終わりたいと思います。

### 36 フジタニ：

皆さん、ありがとうございます。疑問点もかなり多かったと思いますけど、また勉強になりました。もし、4分ぐらいいただければ、ちょっと言い残したことがありますので、もうちょっと発言させてください。一つは、これは李さんが提供してくださったコメント、発表の中ですけども、国民になって、最終的には殺す主体になるという、とても大事な指摘だったと思いますので、これからまた考えたいと思います。国民になるということは、特に大衆民主主義とか、大衆ファシズムの状況でもそうだと思いますけれども、君主や天皇と大衆の所在が混合してしまい、大衆も自分が主権(sovereignty)の持ち主だと思い、自分も殺す権利を持つ、そしてまたアガンベンが言ってるように、主権の所在は、殺して罰を受けないといえますね。そういうふうな関係ではないかというような気がします。ですから、殺す主体になるということが、最終的でしょう。でもそれと同時に死ぬ主体にもなる。つまり、完全な主体は生と死の境界線にあるような気がします。

話がちょっと変わりますが、渡辺さんがおっしゃった、カーター・エッカートのレビューですけど、私も読んだことを思い出しました。最初は私の本をほめてるようできて、最終的には批判している気がしました。カーター・エッカートのような人はやはり、最終的にはナショナリストだと思うのです。ですから、白人ナショナリストである彼にとっては、日系人の話はマイ

ノリティが一生懸命国のために戦っているということで、すごく気持ちいい話なんですね。しかも彼はケン・バーンズというドキュメンタリー・フィルム監督が作ったテレビのためのドキュメンタリーを資料にしてそんなことを言ってるわけなんです。ですから、日系人は最初から最後まで立派なアメリカ国民であったけれども、植民地化された朝鮮人は、もともとはそうではなかったので、やっぱりその二つを比較するのは、違和感があるというふうなことを言ってるわけです。しかし、例えば、第100歩兵大隊の場合、ハワイの日系人から構成されていたのです。その部隊が第442連隊に合流するのですが、その後も何千人のハワイの日系人がこの連隊に志願するわけです。しかし、ハワイがアメリカ帝国の植民地であったことは忘れられがちです。ハワイという植民地を視野に入れなければいけないと思うのです。中村さんもおっしゃられるとおり、アジア系アメリカ人の兵士、特に日系人の兵士は、帝国のエージェントあるいは帝国の主体になったことを避けてきたというか、無視してきたわけなので、それも私は主張したかったわけなんですね。収容所の問題を考えた場合、これは常にネイションの問題であって、帝国主義の問題ではないと思われがちなので、その帝国主義とのコンテキストを主張をしたかったわけです。日系人の場合、自然にアメリカ人になったわけじゃなくて、いろんな力関係、権力関係の中で、いわゆる立派なアメリカ人、模範的なアメリカ人になったわけなんです。板垣さんもおっしゃったように、戦後の日本国憲法に人種によって差別してはいけないということを書いていますけれども、実際にそういう差別は露わに見られるということも、やっぱりレイシズムとその否認の関係を表してるような気がします。それで最後はやっぱり正直に言って、どのようにすれば現在韓国にいらっしゃる読者が、私が望んでいる

ように私の本を読んでもらえるかという問題です。私が朝鮮植民地主義を隠蔽してきたかのように読まれるとすごく残念にしか思えないわけです。

### 37 渡辺：

あの書評会の場合でも、やや片面的にしか論評できなかった書評者に対して、とても批判的だった聴衆は結構いました。その後、刊行された論文集には書評者の書評しか掲載されていませんけどね。そのことだけ申し上げたいと思います。

### 38 フジタニ：

そこでもやっぱり誰のためにこの本を書いたかということ聞かれて、そして特に多分、アメリカ人のために書いたって話になったのです。だけど、やっぱりね、これもすごく正直に言いますけど、アメリカ、日本、韓国、あるいは他の国、例えば、台湾の読者を一応、前提に考えて書いたつもりなんです。ですから私の意図に反して理解されるというのは、なかなか残念ですね。それだけです。

### 39 尹：

もう一つだけ。序文で言及しているように、本書の総力戦体制に対する認識が山之内靖の「総力戦体制論」に基づいていることに注目しなければならぬと思います。なぜならば、総力戦体制をシステム論的に捉えると、帝国主義が起こした戦争の本質的な問題より総力戦体制の運営システムが重要になるからです。山之内靖編集の『総力戦と現代化』は、日本の総力戦体制を社会システム論的な観点から西洋の帝国体制と比較するものでした。そもそも、帝国主義というのは構造的に植民地主義が内在されています。そして、その植民地主義は文明化の名分で野蛮な原住民に対して行う強

制的な帝国の支配を正当化するイデオロギーです。しかし、総力戦体制論は、日本の帝国戦争を社会システム論的に解明することによって戦争の歴史的な実態が見えなくなり、戦後その歴史を否認することができるような構造を作りました。日本の総力戦体制論は1960年から議論が始まって今日に至っていますが、その論争についてはまた機会があれば話したいところです。

#### 40 フジタニ：

植民地朝鮮の深い歴史とか、日本のより深い歴史、明治から大正にかけての歴史の思想とか、そういうふうなことも視野に入れなければいけないという気持ちもありましたけれど、なかなか一つの作業でそこまでまとめきれないということはあるんですが、やっぱりその一つ一つの地域の個別性 (particularity) のようなことを、十分にピックアップできなかったことは事実だと思います。それで、一つ思い出したのは、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』に対する批判ですね。サバルタン・スタディーズの研究者として知られてる、パルタ・チャタジーの批判は、そういうふうな国民国家から形成される社会システムの分析だけでは、例えば、南アジアの植民地主義や南アジアのナショナリズムは捉えられないし、またそこに住んでいる人たちの主体的存在が抜けてしまうというものです。私の本に関してもそういう批判があってもおかしくないような気がします。ただ、私の手法が社会システム論的な分析として理解されるのはとても残念です。

#### 41 水谷：

もっと続けたいところなんですけれども、海外はもう深夜だったりしますし、皆さんもお疲れかと思しますので、このあたりで閉じたいと思います。今回、報告を引き受けてくださった

お三方、それから前日になって、急にコメントをお願いした方々、本当にありがとうございました。それからもちろん、フジタニさんを含め海外の時差のあるところから参加いただいた方々、本当にありがとうございました。

#### 42 一同：

どうもありがとうございました。

\* \* \*

#### 43 フジタニ「シンポジウムを終えて」:

まずなにより、熱心かつ周到に、シンポジウムを企画し、これに参加して下さったみなさんにお礼を申し上げたいと思います。私は、まずみなさんがお書きになったものから学び、それに次いで「フロア(すなわちスクリーン)からの」プレゼンテーションとコメントを聞いてさらに多くを学びました。拙著についての肯定的な評価は励みになりましたし、同書にみられるいくつかの弱点や飛躍にたいしていくぶん懐疑的な、あるいはそれらをいみじくも指摘してくれた率直なコメントにも感謝しています。たしかに、会が終わりに近づいたころ、とくに尹さんの話を聞いてからですが、私の口ぶりがやや物悲しく不満げであったことは自覚しています。彼女を責めたり批判したりする気は毛頭ありませんでした。彼女からの評価に私は首肯しませんが、あのような反応は東アジアにおけるポストコロニアル性のもつ矛盾ととりわけ関係しているということに、私たちは留意する必要があるのでしょうか。とはいえ、不満を覚えたというのが正直なところでは

駒込さんへ

駒込さんが私を批判していたとはまったく思いません。むしろ、駒込さんや水谷さん、板垣さん、李さん、それに聴衆の多くの方々は、私にとって親友かつ政治的な仲間です。ですから、駒込さんのお書きになったものも昨日のお話も、友人として、そして政治的な結束のしるしとして、助言をくださっていると受け取りました。私の全般的なアプローチや手法について、強く支持してくださっていることも理解しています。駒込さんや水谷さんがメールでご指摘なさったように、グローバルなシステムのなかで関連していたものとして、またそれと同時に、個々の細部に注意を払いながら批判すべきそれぞれの帝国のものとして、帝国

主義を多角的に批判することをめざしてわれわれはみな取り組んでいます。しかるべきときには、決して躊躇せずに「批判」してください。また、時間をかけて慎重に言葉を選んだ長文のメールを書いてくださったことにも感謝しています。駒込さんと尹さんを一緒くたにして返答してしまったのは適切ではなかったと思っています。そのせいで、私が駒込さんを同じカテゴリーに括っているように思われてしまったかもしれませんが、それは私の意図するところではまったくありませんでした。

さて、いただいたメールについてですが、駒込さんの提起された問題は複雑ですので、整理することが重要だと思います。まず、志願制と徴兵制にかんして、そうですね、同意見です。われわれが明らかにする必要のある問題は多岐にわたりますが、おそらくもっとも重要な問題のひとつは、その多数が非常に貧しい家の出身で選択の余地がほとんどなかった、徴兵された日本軍兵士の立場と責任をどう理解するかということだと思います。駒込さんはどのようにお考えでしょうか。とはいえ、どのようにすれば私たちは、日本の民衆を軍事指導者によって犠牲にされた人びととする言説に回収されることなく、日本軍兵士たちを加害者であると同時に被害者としてあつかうことができるのでしょうか。私にはこの難問にたいする答えは容易にはみつかりません、きっと、駒込さんが責任をもってそれに取り組んでいかれるのでしょうか。

普段なら自分のことを語るのは好まないのですが、私はベトナム戦争時に徴兵を検討された年代なのです。そのため、戦時になにをすべきかという明らかに不道德な問題について考えざるをえませんでした。ご存じかもしれませんが、当時、徴兵の順番は抽選で決定されました。人びとはもし抽選で自分の誕生日が最初に引かれたら、真っ先に徴兵されなければならなかったわけです。抽選で誕生日が選

ばれつづけ、徴兵の割り当てが満たされるまで若者たちは兵隊にとられていきました。正確な日付は覚えていませんが、1972年前半のある日、私の生まれ年である1953年が引かれました。私は9月生まれですから、まだ18歳だったと思います。私の誕生日は43番目かそこらでした。確実に徴兵されるように思われたので、その場合にはどうすべきか考えざるをえなかったのです。選択肢のひとつには、良心的兵役拒否がありました。父が仏僧だったので、もし試みていけば、うまく拒否することができたでしょう。しかし、私には良心的兵役拒否を行うことは考えられなかったのです。というのも、富裕層や高学歴者、白人は、徴兵を免れる抜け道を見つけることができたのにたいして、貧困層や有色人たちにはそうした選択肢はなく、不釣り合いなほど数多くが死ぬことも、私にはわかっていたからです。実際には家庭はずいぶん貧しかったのですが、私は教育やコミュニティのつながりといった恩恵を享受していました。私は確固とした決断を下さず、徴兵されるまで待つことに決めました。兵隊にとられたら、そのときに戦争へ行くのを拒否しようと思ったのです。[そうしていれば]おそらく投獄されることになったでしょう。私は全然知りませんでした。まったく偶然にも、徴兵はその年に終了したのでした。1952年出生者が最後に徴兵されてベトナムへ送られた人たちでした。私は1年の差で免れたのです。徴兵に強く抵抗したわけではありませんし、なにも英雄のようになる必要はありませんでした。ただ幸運に恵まれて、それにベトナムやその他の東南アジアの人びとの強靱な力のおかげで、私は救われたのです。

このような経験をしたことで、人びとを戦争に送ったり殺めたりする権利が国家にあるグローバルなシステムのなかでいかに生きるのかについて、個々人が非常に厳しい決断を結

局は下さねばならないということを考えるようになったのではないかと思います。私はあらゆることを国家のせいにしてきたでしょうが、もし戦争に行っていたら、そのような軍事国家形成に自らが参与しているという問題にいずれ直面せざるをえなかったでしょう。はっきりとはわかりませんが、もしかすると、後者、すなわち国民国家形成とその総体であるグローバルなシステムがいちばんの批判の対象であるべきなのかもしれません。ことによると、個々の日本軍兵士に、あるいは殺戮へ加わることに抵抗した英雄的な人物だけに、焦点を定める時機ではないのかもしれませんが。もちろん、彼らの決断や日本軍兵士となった植民地支配下の人びとの決断は、私の場合よりもはるかに難しいものでした。おそらく、そうした類の仕事をすることによりよい頃合い、つまり、日本政府や日本の人びとが植民地や日本帝国の責任という問題により適切に向きあうときがやってくることでしょう。しかし、私にはあまり確信がありませんし、駒込さんの決断されるところについてお聞きしたいと思っています。

水谷さんへ

コメントと励ましの言葉をありがとうございます。水谷さんのなさっている間-帝国的な仕事と研究されている比較のポリティクスは非常に重要だと思っています。おっしゃるように、私たちが過去について学びなおさねばならないことは山積しています。水谷さんは『黒い王女』というデュボイスの小説をお読みになったことがあるでしょうか。これは、アジア人やその他の有色人たちがアメリカの黒人たちと手を組むことの寓話です。たしかに、ボドプール(Bwodphur)のマハラジャという王女について、いくぶんエロティックなオリエンタリズムがみられます。しかし、私の思うところ、黒人とアジア人のちがいをこえて結束したいという、

デュボイスのような黒人国際主義者たちの強い願望をその作品はあらわしているのです。もちろんデュボイスは、日本の帝国主義をはっきりと批判できなかつたことで、しかるべき批判を受けてきました。他の黒人国際主義者の一部とは異なり、彼はそうした批判を明確におこなえませんでした。とはいえ、私の読みでは、日本は世界の虐げられた人びとの側につくのか、それとも欧米の帝国主義者を模倣するのかわる分裂した国家であったことを、デュボイスは理解していたのです。日本の帝国主義にかんするデュボイスの限界を私たちは認識しなければならないことは間違いありませんが、これで十分だとは思いません。当時、デュボイスが日本を批判しようとするのを困難なものにした、合州国やイギリス、植民地世界におけるきわめて人種主義的な状況も認識する必要があります。こうした意味では、10年以上前に京都で観た、北海道のある朝鮮学校をとりあげたキム・ミョンジュン監督の2006年のドキュメンタリー映画『私たちの学校』<sup>ウリハツキョ</sup>を思い出します。私とその映画を鑑賞したさい、観客のなかには、在日朝鮮人の生徒たちが北朝鮮をユートピア同然のように想像しているさまを嘲笑する人もいました。しかし私は、そのような理想化された北朝鮮像をこれらの青年たちに抱かせる要因となった、彼らが経験してきたにちがいないレイシズムや差別について考え、深く心を動かされたのです。

ご存じかもしれませんが、デュボイスやその他の黒人国際主義者たちがインスピレーションや結束を求めてアジアやその人びとに目を向けていたころ、デュボイスは日本に来て、同志社も訪れています。1936年12月の同志社でのデュボイスを収めた写真付きの記事を添付しています。もしご覧になったことがなければ、興味深く思われるのではないかと思います。また、元教え子の方の論文もありがとうございます

ます。重要な論点ですね。

李さんへ

李さんのなさった仕事すべてにたいして、あらためてお礼申し上げます。シンポジウムを開いてくださっただけでなく、とても刺激的なプレゼンテーションまでご準備なされたうえ、翻訳事業も牽引してくださっていますね。フーコーからの引用について、また人民が兵士という主権主体になっていくとの議論について、私はもう一度考えなおしました。その引用を読むと、戦争国家としての合州国の現状について考えざるをえませんでした。ここでは実のところ政治とは戦争の連続であって、戦争は政治の延長であるというクラウゼヴィッツの議論を逆転させています。そこで私は、南北戦争後の国民統合を理解するためにその引用が使えるかもしれないと思うようになりました。合州国における南北戦争の終結を国民統合とみなする一方で、今日では、国民統合とは実際には戦争の連続であったと考えることもできるので、いかに南部連合国の支持者や白人至上主義が現在にいたるまで再生産されつづけているか、また、半自動小銃で2人の抗議者を射殺したウィスコンシンの17歳の少年による事件をふくめ、それらがいかに戦争を想起させるような策略をなおも用いているのかには、たしかに驚かされます。ひょっとすると、おなじことが明治維新後の日本にもいえるかもしれません。おそらくそうだと思いますが、どうでしょうか。

板垣さんへ

お考えを共有していただく時間があまりなくて申し訳ありませんでした。板垣さんの言及なされた状況は、私がエピローグであまりにも手短にとりあげたものですが、とても重要だと思います。憲法をはじめとする文書で公式にレイ

シズムが否定されていることと政府(それに大半の日本人)とのあいだに落差が相変わらず存在していることは、上品なレイシズムが今日にもみられるより粗野な類のレイシズムをいかに補完しているかを端的に示しています。私のみるところ、移民や帰化を制限する法律、さらには外国人労働者を非居住者と分類することも、レイシズムを再生産しつづけています。板垣さんがエピローグにふれてくださったことで、戦後直後にどれほど急速に朝鮮人兵士が忘却されていったかを回想している、1947年に発表された中野重治の作品をとりあげることができたかもしれないと思いました。

ともかく、みなさん本当にありがとうございます。これらすべての問題にかんして、ひきつづき協同したり議論したりすることを楽しみにしています。

\* \* \*

#### 44 水谷「シンポジウムを振り返って」:

シンポジウム、本当にお疲れさまでした。司会進行役だったので、発言する機会がなかったのですが、非常に刺激的に会になって大変良かったと思います。

私自身も「比較」に関係する研究をしているので、「何であえて比べるんだ」という批判があることを聞いて、歴史学においてフジタニさんのような問いを発することの難しさ、ただそれゆえの重要さを再認識しました。駒込さんの本(駒込武『世界史のなかの台湾植民地支配——台南長老教中学校からの視座』(岩波書店、2015年))にも日英の両帝国をいかに同時に批判するかというフジタニさんと通底する問いがあるのですが、あまりそこに着目する歴史研究者がいないような気がして、少し残念・不満に思っています。諸帝国がせめぎ合う19世紀末以降の世界史的な展開における帝国主義の重層性をいかに追究するかが重要だと私は思っています。ただ、文学と比べて特定の地域や時代の設定を重視する歴史学において、こういった問題意識が共有されるにはもう少し時間が必要なのかも知れません。

私が今回興味をもったのは、フジタニさんが最後に言及した、異なるマイノリティ/被支配者のあいだの関係性です。合衆国でもレイシズムの犠牲になった日系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人の連带的関係は非常に面白いテーマだと思いました。私は合衆国におけるレイシズムの歴史に詳しくないのですが、ある種の settler colonial な状況において、差別・分断されたマイノリティがいかに連帯しうるのかというのはずっと気になっていたことです。

一方で、アフリカ系アメリカ人が植民地帝国としての日本をどうみていたかというのも、「人種」や日本の「汎アジア主義」を再考する意味で重要なのかなと思います。金子明日香さんという同志社大学の私の元学生が、卒

業後に進学したイギリスの London School of Economics で 'Afro-Caribbean Opinions on the Japanese Empire, 1918-1938' という修士論文を書いたのですが、マーカス・ガーベイ (Marcus Garvey) などの合衆国で活動した英領カリブの革命家たちの日本観の変遷を論じています。彼らは、最初は「有色人種の盟主」として欧米ヘゲモニーに対する日本の挑戦に期待していたのが、日本の周辺アジアへの対外政策 (特に対中国) の帝国主義的性格を知るにつれて、希望が失望に変わっていくというのが大まかな内容です。日系人が合衆国で排他的なレイシズムの犠牲になる一方で、日本人の汎アジア主義者はそれへの批判を朝鮮や満州における自らの帝国支配の正当化に利用したという事実があります。これをどう考えるのかは、ペンシルバニア大学の東栄一郎さんが取り組んできたテーマかと思いますが、私自身は扱うのが非常に難しいテーマだと感じています。

日本の汎アジア主義に欧米の植民地主義・レイシズムの被害者が呼応したケースとしては、ラシュ・ビハリ・ボース (Rash Behari Bose) などのインド人亡命活動家の例が非常に有名です。ただ、日本をめぐる彼らの思想と行動が、インドにおいて反植民地運動を率いた精神的、政治的指導者たちのものを代表したわけではありません。タゴール、ガンディー、ネルーらがいずれも日中戦争における日本の行動を強く非難したことはよく知られています。インド人の反植民地主義的な知識人が日本の植民地主義をどうみていたのかについては、実はほとんど研究がありません。私自身が現在とりにくんでいる研究は、英領インドにおいてインド人によって刊行されていた「インド紙」(Indian press) と呼ばれる新聞・雑誌を分析対象としています。それによって、1907年のハーグ密使事件以降、朝鮮の植民地化をめぐる彼らが

「アジアの盟主」としての日本に非常に懐疑的になっていったことがわかってきました。彼らは日本による周辺アジアの植民地化を非常に深刻に受け止めていたようで、のちに汎アジア主義として定式化されることになる「アジア人のためのアジア」という思想にも実に手厳しいです。同時に、朝鮮の抵抗運動にたいして強い連帯感を抱いている様子が伝わってきますが、帝国主義に対するインドにおける抵抗運動がたかまるなかで、当然といえば当然の反応といえるかも知れません。

ここから見えてくるのは、被支配者同士の連帯の観点から日・英を含むすべての帝国に抵抗し、地球上のあらゆる人々の平等を志向する「下からの普遍主義」あるいは「ラディカルなコスモポリタニズム」の方向性の存在です。インド人も朝鮮人も、それぞれの帝国においてその抵抗運動が抑圧・監視される立場にあり、これがすぐに具体的な「運動」につながるわけではないのですが、後のバンドン会議やダーバン会議にもつながるベクトルであり、なんとか歴史学の主題として描けないものかと考えています。駒込さんのいう「串刺し」の帝国批判が、当時のインド知識人の言説に見いだせることに興奮しながら研究を続けているところです。

フジタニ先生

お返事くださり、また同志社で撮影されたデュボイスの写真を共有してくださり、ありがとうございます。なんと、私たちの大学を彼が訪れていたとは知りませんでした。これは驚きでしたし、私はデュボイスやその他のアフリカ系アメリカ人たちの国際主義にもっと注意を払わないといけませんね。

「親日的な」態度をとったり日本の汎アジア主義を奉じたりしたアジアやアフリカの革命家ないし活動家たちについてどう考えるかは、いつも頭を悩ませているのですが重要な問題で

す。ご指摘なさっているように、欧米の植民地主義やレイシズムというトラウマ的経験を勘案せずに、彼らの思想や行為を心得違いものとして退けることは十分ではないと思います。私が研究している英領インドの場合、R. タゴールやガンディー、ネルーをふくむ、インド人ナショナリストの知識人ないし指導者のほとんどは、1905年の日露戦争での日本の勝利に非常に胸を躍らせました。きっと、インド人たちがこのように感情を爆発させたのは、「白人による」支配のもとで長らく呻吟しているという彼らの認識をいみじくも反映したものでした。他の文脈ではどうなのかあまり知りませんが、アフリカ系アメリカ人が日本の勝利にたいして同様の反応を示したと聞いても、まったく驚きではありません。彼らはカリフォルニアにおける日系移民の人種主義的な排斥をつぶさにみていたのですから、日本や汎アジア主義にたいして、いっそう共鳴していったかもしれません。金子さんの論文は、1921年に日本が提案した人種平等条項に彼らが好意的な反応を示したことを明らかにしています。

私の考えでは、日本の汎アジア主義にたいするインド人ナショナリストの態度は、1907年のハーグ密使事件を経てふたつに分かれ、さまざまな立場が出てきました。タゴールをはじめとして、日本による朝鮮支配の帝国主義的本質をみて、すぐに汎アジア主義に懐疑的になった人びとがいました。他方、ラシュ・ビハリ・ボースのように、日本をアジアの希望とする考えを抱きつづけ、日本の朝鮮併合を「西洋」に対抗するために必要な同盟として支持しさえする人びともいました。しかし彼らはみな、共通してイギリスの帝国主義に反対していたのです。ひょっとすると、こうした内部での緊張は、アフリカ系アメリカ人やアフリカ系カリブ人の国際主義者集団にもみられたことなのかもしれません。